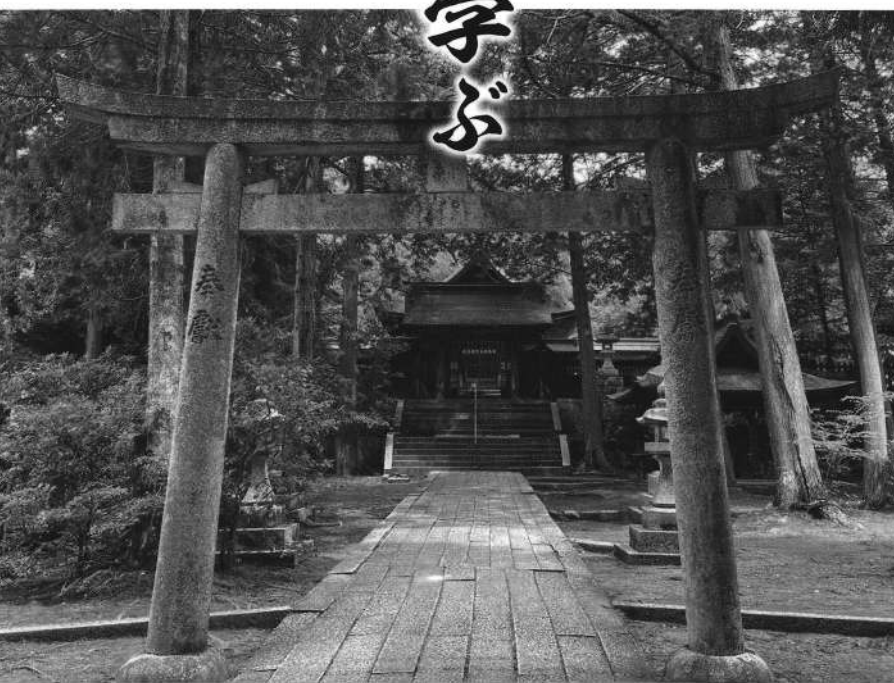


周防緑蔭に学ぶ



講話集

周防緑蔭に学ぶ

第三十七回神道講演全国研修大会 中国大会

【表紙写真】野田神社

裏表紙の写真は 野田神社 絵馬堂

第三十七回

神道講演全国研修大会 中国大会

とき 令和五年七月十二日～十四日
ところ 野田 神社

目次

御挨拶

第三十七回神道講演全国研修大会 中国大会 会長
神道講演全国協議会 会長

山本行恭

(三重県 椿大神社 宮司)

記念講演 一本の万年筆

野田神社 宮司

真庭宗雄 1

猿田彦大神は警察の守護神

山本行恭 7

明治天皇の聖徳と北海道開拓——そして

芦原高穂 17

子孫八十続五十檀八十桑

宮田修 23

アインシュタインの神観念

小倉雄大 28

掃除をするという事

熊谷昭 32

ひとこと

芝幸介 38

海を越える和の心

熊野の神様

嗚呼、沖縄 ― 敬神・崇祖・尊王の島

国防についての一考察 戦艦大和特攻を例として

信仰のカタチ

ゼロの迎撃を読んで

お山は見てござる

料理と神様

沖縄を想う (七月月次祭での講話)

真庭孝雄 43

松田 真 49

大山晋吾 56

伊藤彰教 60

山本晃大 67

鈴木明子 71

高井春明 75

岡田 順 79

小野日隆 83

祓
い

祇園祭終了後挨拶

敬神生活のすすめ

不思議な龍神様

神宮大麻頒布始め祭でのあいさつ

主座を保つ暮らしを心がけませふ

神主に成って良かった

自己と他者はどのように結ばれるか — 作曲家武満徹の考え方 —

希望 — これからの梶本神社

染谷 淑子 89

初村 礼子 93

塩崎 昇 97

大島 靖彦 103

村田 直敏 107

柴田 宜夫 110

山浦 一男 119

永田 孝信 123

杉本 泰郷 129

祈りがつなぐ家族の絆

村上浩基

134

お客様は、神様です

伊賀昇三

141

抑も

山下裕嗣

148

猫は人が育ててもニャーと鳴く

河本文夫

153

G7 広島サミット

村田和之

161

神道と稲作

幡生隆太郎

167

神道講演全国協議会役員名簿

173

神道講演全国大会のあゆみ

175

御挨拶

第三十七回神道講演全国研修大会 中国大会 会長

神道講演全国協議会 会長

山 本 行 恭

(三重県 椿大神社 宮司)

長引いたコロナ禍も、つい先月第五類に下げられたのを待ったかのように、市井は徐々に過去（四年前）の生活にも似るような動きになったことは、誠に喜ばしいことであります。今研修大会も、そんな禍中にあつて、存続させていただけましたことに對し、感謝申し上げます。斯様な中、今回は「維新の國」である長州・山口県を中心とした中国地区の神社関係者の御理解をいただき、神社本庁の御許しも経て、野田神社様並びに山口県神社庁（真庭宗雄庁長）の御膝元の庁舎研修所を御借りして開催させて頂きました。関係各所の皆様には、多大なる御協力を賜りましたこと、衷心より厚く御礼申し上げます。

扱、一五〇余年も前、この國の行方を案じた青年諸氏、各藩の重鎮でもあつた志士たちが、吉田松陰先生の下に集まり、松下村塾で意義のある学びを深め、國を憂いそして後世

に恥じぬ日本を作ろうと決起したのが、明治維新でした。維新とは「維これを新たにする」というものであり、後に幕府から朝廷への大改革がなされる原点を築かれた志士が、長州の地で活躍されました。もとより血氣盛んな強者（兵）らが心を一つにしての大改革によって、新生日本が誕生したものと存じます。

志士らが多く語らいを持った地で一五〇余年前を想像しつつ今に生きる私ども神職が、憂い多き世の中に、一石を投じるべくお役目を頂いていることを改めて認識を深めた次第です。この地に御縁を戴いた私どもは、偉大な大改革者の理念をふまえて、混沌たる世を直す一助たりえる成果を築いていけるものと固く信じています。

重ねて御力添いを賜りました各位に対し、満腔の敬意を表し、有言実行の精神を後に続けるよう精一杯の研鑽と精進を重ねる所存でございます。有り難うございました。

全国研修大会 中国大会



記念講演

一本の万年筆

野田神社 宮司 真庭宗雄

平成二十八年二月に、私の母は、満九十六歳の天寿を全うしました。亡くなる半年前まで、「神主は、お宮をいつもきれいに掃除せんといけん。」といつも私どもを、叱咤激励し続けてくれました。先日、家内とおふくろのタンスの引出しを開けてみたところ、新品の靴下、下着がそのままちゃんと整理してありました。いつも夜になると靴下の修繕をしております。それを見て「新しいのを買ってあげようか。」と言うと「まだ履ける、もったいない」と言っておりました。

母のタンスの引出しを家内と見ながら涙が止まりません。母親は教育の担い手。母親は伝統の保持者と、よく聞きますが、子を思う母の心は何があっても変わることはない、改めて教えられた気がしました。

その母の姉さまは、山口県は旧徳山市、今の周南市河東に住んでおりましたが、十年前に亡くなりました。その姑さんも十五年ぐらい前に百一歳で他界いたしました。お名前を山時シゲヨおばあちゃんと申します。私が徳山へ遊びに行くと、いつも「宗雄ちゃん、よう来たね。ゆつくり泊まって、おいしいもの食べて行きなさいよ。」と大事にしてくださいました。そのシゲヨおばあちゃんは、六人の男の子を授かって、元気に大きく育てられました。その六番目の男の子、名前を「洋六さん」と申します。この洋六さんは、仔細あつて本人が一歳半の頃、千葉県は習志野の枅見家に養子に出されました。洋六さんは、学業優秀で、十五歳で海軍士官学校に入り、十九歳にして軍艦陸奥に勤務することになりました。その時、呉の軍港・徳山に入港の折には、河東のシゲヨおばさん宅を訪れ、休暇を楽しんでおられることも。その時にシゲヨおばさんは、「私があなたの母よ。」とは言われなかったそうです。

そして昭和十八年五月末、岩国市は柱島沖に陸奥が停泊。洋六さんは、習志野に帰省せず、徳山にシゲヨおばさんを訪れ休息。日本で最後になるであろう休日を通すごされました。そして休日明けの朝、洋六さんは、これより南洋方面の作戦に出港する訳ですが、そのことは軍用機密で告げられませんでした。

しかしながら、シゲヨおばさんは、「うんうん、わかったよ。」とうなずかれ、奥のタン
スから一本のパイロットの万年筆を取り出してこれ、そのキャップを取って、和裁の太
い針で「洋六」と彫り記し「はい、これを持って行き。おばちゃんからの、成人式のお祝
いだよ。」と手渡されました。

その時何故「私が、あなたのお母ちゃんよ。」と言えなかったじやろうかと、言ってお
られました。

そして洋六さんは、その万年筆を大事に胸の内ポケットに挿され、「ありがとうござい
ます。いつも身から離さずに大事にします。では行ってまいります。」と、徳山を後にさ
れました。

そして六月八日午後零時十五分、陸奥は謎の爆発を起こし、三好輝彦艦長以下千百二十
一名の尊い生命が周防灘に失われました。

数少ない生存者は、どこにも知らされず寒い北方の地に、また南方の作戦に加わされ、
シゲヨおばあちゃんたち家族が、洋六さんの戦死を知ったのは、半年後のことであつたと
聞きました。

終戦後、シゲヨおばあちゃんたちは陸奥遺族会を結成。生存した人々を中心に陸奥顕彰

会を立ち上げ、三好艦長夫人以下皆さんで、毎年六月八日山口県大島郡東和町と、岩国市柱島で慰霊祭を斎行。「どうしても陸奥を引揚げたい。」との思いを年毎に強くされ、昭和四十年に県庁へ引揚げの願いを出されました。

昭和四十二年に前年と同じように請願に県庁に行かれた時、ロビーで神戸の浜田物産社長・浜田悦蔵さんと会われました。浜田社長は皆の願いを聞かれ、呉市にある深田サルベージに遺族の熱意を届け、あらゆる手立てを惜しむことなく使われました。「陸奥は揚げられます。必ず揚げられます。」と浜田社長は約束され、遂に昭和四十五年六月八日東和町筏八幡宮で引き揚げ工事安全祈願祭が、二百余名の遺族、顕彰会、また工事を行なう関係者が参列のもと執り行われ、引き揚げ作業が開始されたのです。

そして昭和四十六年三月二十日柱島沖、おばあちゃんたち遺族の見守る中、ワイヤー十五本で四番砲塔が、ポツカリと海面に現れました。おばあちゃんたちは心から「息子よお帰り、寒かったらうね。」と涙ぐみながらも、喜ばれたそうです。そしてこの年より昭和五十年までの五年間、水深四十メートルを超える海底ゆえの困難極まる中、ご英霊の遺品とともに、主砲などの艦体の七十パーセントを引き揚げ、陸奥の沈没地点を望む丘に陸奥記念館が建設されました。

昭和五十年春、最後の引き揚げが終了。その時、徳山へ呉の深田サルページから電話がありました。「恐れ入りますが、すぐに呉の会社まで来て下さい。」おばあちゃんは、胸騒ぎを覚える中、取り急ぎ呉の港まで行き、会社の応接室で待っていますと、係の方が、真っ白な布に包まれた小さな物をテーブルの上に置かれました。そしておばあちゃんがそれを手に取り、包みを広げると中には、一本の万年筆が。「あっこれは、洋六にあげた万年筆じゃ。」おばあちゃんは、しっかりとその万年筆を抱き上げ、「洋六さんお帰り。寒かったろうね。冷たかったろうね。」と三十二年ぶりに息子が帰ってきたと、頬には涙が伝っていたそうです。

私も徳山に呼ばれ、床の間の三方に安置されたご英霊の万年筆を拝ませていただきました。「よかったね。おばあちゃん。洋六さんが帰ってこられましたね」と。

それから一カ月後、シゲヨおばあちゃんは万年筆を大島郡東和町の陸奥記念館に納められました。大事な万年筆を何故に。それは、「私と同じ思いを持つ母が千百余名いる。私と同じ思いを持つ妻がいる。」との思いで納められたのです。

三十数年間、冷たい海底にあっても、母は毎朝陰膳をお供えされ、必ず帰って来ると祈っておられました。母と子の絆、子と母との絆は、切っても切れないのです。今の世にあつ

て一番忘れてはならない事では無いでしょうか。

改めて、母の偉大さに感謝し、この度の記念講演とさせていただきます。
ご清聴いただき、誠に有り難うございました。

猿田彦大神は警察の守護神

山 本 行 恭

椿大神社は導きの祖神（猿田彦大神）をお祀りする日本最古の神社とされています。

昭和七年、小栗一雄警視総監（第三十九代）により猿田彦大神を皇室国家警察の守護神として警視庁の屋上にお祀りすることが発案されました。しかし、猿田彦大神の本宮がどこであるのか皆目見当がつきませんでした。

そこで小磯国昭拓務大臣（後の第四十一代内閣総理大臣）に依頼して調査が行われました。内務省神社局の宮地直一博士を中心に、神宮皇學館の坂本広太郎教授、伊勢の神宮の御巫禰宜の三名が、全国の猿田彦大神を主祭神として祀る神社の調査を行い、椿大神社にも来られました。

当神社は紀元前三年に鎮座した古い歴史をもつ神社ですが、四百年前に織田の兵乱によつて焼き討ちをされました。その際この神社を守ってくださった大小様々な木々が、今

日神社の参道を形成しており、境内の奥深い森に歴史の深さを感じていただけたのではないだろうか。

織田勢による焼き討ちのなか、大般若經典六百巻と樹齡一千二百年以上のヒノキが消失を免れました。当時の宮司が御神体を奉持して近隣の川向うに避難しました。昔から在る大釜を運び、それを用いて飢えをしのぎ、火の納まるのを待ったそうです。

こういった歴史を経た当神社の現在の社殿は、昭和四十三年の造営であり、比較的新しいものです。

しかしながら、その森の深さに小磯拓務大臣は、「ああこれは歴史ある神社だ」と感得され、猿田彦大神の本宮であるというお墨付きをいただき、「地祇猿田彦大本宮」という称号を内務省からいただきました。その後、昭和十年に警視庁の屋上に猿田彦大神の御分霊が御奉戴をされました。

ところが昭和二十年終戦後、GHQの神道指令により政教分離が発令され、猿田彦大神は警視庁にお祀りすることができなくなりました。

猿田彦大神が警察の守護神とされるその原点は、天孫降臨の神話に遡ります。天皇陛下のご先祖様である、瓊瓊杵尊が地上に御降臨されました。しかし、その時は天と地がつか

がつておらず未開であります。ですから瓊瓊杵尊はどこに行けばいいかわからないのです。『古語拾遺』のなかに明らかにされていることではありますが、天照大御神より猿田彦大神に「私の孫が地上に降ります。あなたは国津神の祖神としてこの御子一同をお迎えして、目的地である九州の高千穂の穂^{くしふるみね}觸峰までお導きをしてください」と使命が伝えられました。猿田彦大神は、天地の境目に沢山の分かれ道がある「天の八衢」という場所に立ち向かわれました。そして猿田彦大神を表す言葉として日本書紀に「天照輝地」つまり「上は高天原を照らし、下は葦原の中つ国を輝かし給う」と書かれてあります。つまり下からくるものを見張りつつ、上から来る瓊瓊杵尊御一行も見逃してはいけません。その際、猿田彦大神は鉾を持って、威風堂々たる恰好で立ち向かうのであります。

一方上から降りてくる御一行は、天照大御神と猿田彦大神のお約束を知らない。「下にいる目をぎよろぎよろさせて怖い顔しているのはいったい誰なんだ」とたじろいでいました。その中の男神が「よし、おれが聞きに行つてやろう」といつて降りていきますが、その顔があまりに恐ろしく、途中で尻尾をまいて戻ってきました。そのあと別の男神が挑戦するのですが、また逃げ戻ってしまいます。そこで一行の中でただ一人だけの女性神である天之鉦女命が行くわけです。二人の男神が行つて戻ってくるほどに怖いことから、何か

特別な「武器」を持っていかないと考えた天之鉦女命は、装束の裳紐を押し下げて降りてゆきます。そして今でいうところのスカートが風を受けて翻り、女陰をあらわにして対峙します。

猿田彦大神が「どうしてそんな格好をするんだ」と言い問答が始まります。これが天地をつないだ初めての交わりだったのです。そして話が進み「天照大御神より瓊瓊杵尊をお導きするよう使命を受けてここで待っているのです」「それでは私たちがその一行ですからご案内ください」と言葉を交わしました。そして天孫降臨の道が作られました。その道とは何か。

毎年椿大神社では今年一年のテーマになる漢字一字を設定しています。今年のテーマはこの『道』であります。道というのは漠然としたものです。汚くしても道、綺麗にしても道、皆様も毎日お掃除をされるでしょう。また、お店をしている方は、お店の前を掃いて、水を打って、お客様をお迎えされるでしょう。これが道なのです。

「道」の部首は之繞しんにょう。之繞には歩く、走るという意味があります。なぜつくりは首なのか。これは、異族・違う人種の首を旗代わりに引っ提げてこの道を歩くということ。つまり、外敵を防ぎ異族の首を取ったので、この道は安全な道だということ表しています。そ

れを浄道といい、つまり祓い清めるといいうのがこの道の大部分なのです。

さて、この道をいま現在、我々の身の回りに置き換えましょう。

六歳の小学生児童が、生みの親と兄弟によって、いじめられ叩かれ殺される。トラックで運ばれて、川原に捨てられる。また、四歳の女の子が机から落とされて亡くなってしまう。こういった事件が横行しています。人間としての人道的な問題だと思っています。道を外れた、外道です。外道が巷に蔓延っています。なぜか。その原点を考えてみましょう。祖父母や両親に教えてもらうのが道なのです。じいちゃん、ばあちゃんが間違っていることは「だめだ」と叱る時代がありました。父ちゃん母ちゃんがそれを諫めてくれることがありました。

今はお中元のシーズンですね。いずれのおうちにもたくさんのお中元の品が届くでしょう。それを楽しみにするご家庭があるわけです。お中元が届き「わーいお菓子だ」といって、包装紙を破ってしまつて、さあ食べようという家庭なのか。或いは、「ちょっと待ちなさい。食べる前に先ずは神様とご先祖様に御供えしてらっしゃい」と親が言います。子どもはお供えをしたら次は頂けるんだ、と目標が設定されます。さあ食べようとする。「待ちなさい。破らずに袋を綺麗にとつて、おじいちゃんおばあちゃんにお持ちしなさい。」という

んですね。祖父母はお菓子が欲しいわけじゃないけども、そのような心掛けが嬉しいんですよ。こういう家庭には一本の道が通っています。

しかし近年、こういった家庭が少なくなってきたことを思うと、どこか道が違ってきているんじゃないかと思っています。

今を生きている我々人間として何を学ばなければいけないのか。人に生まれた以上は、進化・発展するために生きなければならぬ。進化・発展ということを度外視してはならないのです。

袖振り合うも他生の縁、どんな方とお会いしても、教えをいただくことがたくさんあります。その教えの中には、それぞれが経験・体験された非常に重要な意思・記憶を持っていらつしやる。そこをお互いが胸襟を開いて話をするのができたかどうかでしょう。必ずひとつふたつありがたい教えを得られるに違いありません。そういったコミュニケーションさえ今は無くなっています。

我々も携帯電話を使います。パソコンも使います。非常に便利ですが、残念ながら今の時代、若い人はこれなしには動けなくなっています。コミュニケーションがいらぬ、隣にいる人にもメールで連絡をする、話す聞くといい行為が、徐々に薄れてきてしまうと、

人間の聴覚・視覚・思考・脳が衰退していつて、頭の小さな人間に退化してしまっています。そうなのではないのです。

警視庁にお祀りしていた御神体は椿大神社に返ってきていますが、終戦二十年以来交流があり、警視庁からは年頭に参拝され一年の御安泰を祈願されるのが恒例行事となっています。

その際、警視庁の警備部の警備課・警衛課・警護課の方々に、毎年お守りを差し上げており、課長さんから全課員にお渡しいただいているそうです。私は本当にちゃんと全員に渡っているのか、半ば試すような思いで、数年前に文科省の大臣と食事をしましたが、やはり現役の大臣ですからSPが警護していました。「お守りを持っていますか？」と尋ねると「はい！もらってます！」っていつて、胸元から椿大神社のお守りを取り出したものですから、とても嬉しかったですよ。それほどに彼らがお守りで護っていただいているんだと御利益を信じています。

今年の三月も、警視庁、警備部の神棚前で（椿大神社のお札がお祀りされている）、全員で拝礼をさせていただきました。

その折、「昨年の安倍さんが凶弾に倒れた事件、岸田総理に対する未遂事件、様々な事

件があつたので広島サミットは大変でしょう？」と課長に聞くと、六百人体制で行うとのことでした。「誠にお疲れでございます。どうかご無事でお戻りください。私どもも任務が完遂されるようお祈りさせていただきます。」と申し上げました。

警視庁との繋がりでなく、私どもは幅広い意味で、猿田彦大神が導きの祖神であるという由縁を以て、何もかも守り導いていかなければならない。との壮大な使命を持っています。

剣道を教える先生がいました。

「先生、全員揃いました」と生徒が防具を着て座ります。「よし、じゃあ玄関に置いてある靴を見てきなさい。」と先生に言われ生徒が見に行ってきました。先生が「どうだった」と尋ねると「あちこちに脱いでありました」と答える生徒。先生は「じゃあ今日の練習は辞める」というんですね。生徒が「せっかくだから練習してください」というと、先生は「武道というものは、強くなるためのものではない、心を鍛えないといけない。今すぐ、全員靴をそろえてこい！」っていったんですね。

つまりしつけなんですよ。

「はい」という素直な心、「すみません」という反省の心、「おかげ様」という謙虚な心、

「私がします」という奉仕の心、「ありがとう」という感謝の心を養いましょう、と椿大神社の職員は、これを毎朝大きな声で唱和をします。

書いてあるものを読むことは簡単です。読むことによってまた自分の意識を覚醒させます。そして自らが恥ずべき行為をしてはならないということを常に啓蒙するためにやっています。

単なる挨拶、掃除、行動、礼儀作法、これが出来る出来ないによって、家庭の教え、即ち「道」の良し悪しがわかります。

家庭の小さなお子さんが、遊びに行く、学校に行く、帰ったとき、あるいは朝、おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんに挨拶し、仏さんと神棚に手を合わせてますか？これを三才までにしつければ絶対子どもは手放しても間違った道にはいかない。これが昔からいう「三つ子の魂百まで」ということです。これを蔑ろにしてしまっている現在の教育。メスをいれて、もう一度新たな方法でやっていかなければならないと思います。

昭和二十三年、戦争が終わって三年後に、教育勅語の廃止が可決されました。当時の文部大臣は、「もう一度教育勅語を復活させなければだめだ」と警鐘を鳴らしました。軍部に囲まれていた国民が「やっとこれで自由になる」と思想的に大きく変わってしまいました

た。これでは日本はだめになってしまふと唱えましたが、衆参両院はそれを取り上げることはしませんでした。その結果、現在の日本に至ったのです。

教育というのは引き出しです。いろんな学びを詰め込んでおけるテーブルです。そして引き出しを作ってあげて、こういう時はこうするんだよと示してあげるのです。

別に宗教、神社だから信仰しなさいとは言いません。けれども、今日得た新たな学びもあつたでしょう。それを基に各家庭が発展されること以上の喜びはありません。

今日は本当に、お忙しいところをようこそご参拝いただきました。ありがとうございます。

(三重県 椿大神社 宮司)

明治天皇の聖徳と北海道開拓——そして

芦原高穂

嘉永六年アメリカのペルー来航により、『蒸気船たった四杯で夜も眠れず』といわれた、欧米列強の国家戦略に翻弄されるなか、なんとか独立のための国家主権を確立し、世界の国々吾していかなければならないという状況の中で、幕藩体制から中央集権の国家として、維新の大業が成され、新しい国の仕組みに変わりつつある中、幕府なき体制の中、国家をまとめる上で重要な役割をはたさせられたのが明治天皇というお方であります。

新しい枠組みとしての明治政府の体制も、国民との距離は極めて大きく、中央集権体制の構築には、いろいろ難しい課題があり、名実ともにというわけにはなかなか行かない現実もあったと思います。

別けても、旧幕臣などの人々の中には、新政府を認めず、兵を挙げる者もいて、紛争が相次いだのでありました。

とりわけ、手つかずの北海道は未だ『蝦夷地』といわれ、外国の外交官から、ロシアの所謂南下政策で、樺太千島や蝦夷地をロシアは狙っているが、日本は何ら対策をしていない状態であり、このままでは蝦夷地もロシアの手に落ちるのは時間の問題と指摘されておりました。

江戸時代における蝦夷地は松前藩の領地として、防御の任を任されておりましたが、ロシアとのいざごさは、幕府の処罰を恐れ、ほとんど報告されることはありませんでした。しかし、こうした外交官を通した働きかけに、北方の脅威が現実の物と認識されるに至り、幕府は蝦夷地を直轄領と定め、直接統治に向け開拓の実と共に、国土防衛のために諸藩に命じて、蝦夷地入地を通じて、開拓と警護を命じたのでした。

そうしたなか、時代は江戸幕府を中心とする幕藩体制から、明治維新を通じて、政府を中心とする中央集権体制の国に変更となり、版籍奉還を通じて、中央集権国家として、近代国際社会での一員として、独立を守り国家主権の確保に向けて、変革を余儀なくされていったわけですが、国家の統一的な権威としてのお立場もさることながら、国の行く末を案じておられた明治天皇は、国内巡幸を御決意下さるわけであります。

明治新政府において、ご承知の通り都を京都から東京に遷都するに当たり、皇室とりわ

け明治天皇におかせられましては、明治二年遷都に伴って東京にお移り遊ばしますが、それまでの歴代天皇とは違って、国内巡幸を盛んにおこなわれます。

北海道にも明治十四年東北と共に巡幸遊ばされます（明治九年最初のご巡幸）その際札幌からの帰路に当たりますが、島松というところに住んでいた中山久蔵という人のうちを休憩のための臨時の行在所に指定しご休憩遊ばされます。この中山久蔵という人は米作り先駆者でもあります、もともとは大阪出身の人で、自ら米作りを志し、寒冷に耐えうる品種の開発にも取り組み、別けても新規に米作りに意欲を持つ人には無償で稲種を与え、稲作の普及に努めた人であります。

そうした取り組みを評価されていたのだと思いますが、この時のご巡幸に際しても、札幌からの帰路この島松の中山久蔵宅に立ち寄られ、ご休憩と共に水田耕作の様子をご視察遊ばされるといふ榮譽を賜ったことから、こうした取り組みに大いにご期待のほどいばかりかと拝察されるのであります。

ご一行は千歳駅通に宿を取り翌日室蘭から乗船森町の港に接岸、函館を経て津軽海峡を渡り青森に向かわれたのであります。

そして、青森から秋田に進まれ、旅の最終地である秋田は現在の能代市二ツ井町の坂に

差しかかりました。

歩みを進められた行列は、ここで長い旅を労うべく京に在って留守を守られていた妃である昭憲皇太后よりの便りと共に一首の御歌が添えられておりました。

昭憲皇太后御歌

「大宮のうちにありてもあつき日をいかなる山か君はこゆらむ」

夏の長旅を氣遣う皇后からの「恋文」を受け取った明治天皇は、その地の美しさに深い印象を抱かれ、「きみまち阪」と命名されました。それが現在の県立自然公園「きみまち阪」公園です。

この優雅な命名の由来を愛する能代市二ツ井町が、恋文復権を全国に発信しようと始めたのが恋文コンテストでした。

平成六年から十年間に寄せられた恋文は、三万四千二百二十七通にも及びました。

平成十五年第一回の入選作品で対象に選ばれた作品

きみまち阪の四季

秋田県能代市二ツ井町

『天国のあなたへ』

娘を背に日の丸の小旗を振ってあなたを見送ってからもう半世紀がすぎてしまいました。
た。

たくましいあなたの腕に抱かれたのはほんのつかの間でした。

三十二歳で英霊となつて天国に行つてしまったあなたは今どうしていますか。

私も宇宙船に乗ってあなたのおそばに行きたい。

あなたは三十二歳の青年、私は傘寿を迎えている年です。

おそばに行つた時おまえはどこの人だなんて言わないでね。

よく来たと言つてあの頃のように寄り添つて座らせてくださいね。

お逢いしたら娘夫婦のこと孫のことまたすぎし日のあれこれを話し思いきり甘えてみた
い。

あなたは優しくそうかそうかとうなずきながら慰め、よくがんばったとほめてください
ね。

そしてそちらの「きみまち阪」につれていつてもらいたい。

春のあでやかな桜花、

夏なまめかしい新緑、

秋ようえんなもみじ、

冬清らかな雪模様など、

四季のうつろいの中を二人手をつないで歩いてみたい。

私はお別れしてからずっとあなたを思いつづけ愛情を支えにして生きてまいりました。

もう一度あなたの腕に抱かれてねむりたいものです。

力いっぱい抱き締めて絶対はなさないで下さいね。

この催しは十年に亘って開催され、多くの作品が寄せられたわけですが、今でもこの公園に行くと施設に刻まれたこの作品を目にすることができ、訪れる人の涙を誘っているそうです。

(北海道 旭川神社 宮司)

子孫八十続五十檀八十桑

宮 田 修

私は、今は亡き両親に大変感謝しています。よくぞ私という子どもに命を繋いでくれたと思うからです。戦前のことです。私の父親は、東京の下町で写真館を経営していました。両親ともに明治生まれで、八人の子どもに恵まれ、幸せな日々を過ごしていました。

それが昭和二十年三月十日の東京大空襲で暗転しました。写真館は全焼し、宮田家は、収入のあてを失ってしまったのです。八人の子どもたちを飢えさせないために私が生まれた千葉の田舎に移住し、農業を始めました。日々の暮らしが激変してしまいました。しかしその困難な中で九人目の子どもをもうけました。それが私であります。

あの苦しい時によくぞ私を産んでくれました。有り難いことです。子どもの頃から常にそう考えながら生きてきたのです。

子孫八十続五十檀八十桑——うみのこのやそつづきいかしやくわえ——と読みます。

子孫が永く栄えるようにという神職の祝詞に頻繁に出てくる言い回しです。日本人は、神さまに「子孫繁栄」を願いつづけてきたのです。

まさに私の両親は、「日本人」でありました。すでに八人の子どもがいて戦災で家を焼かれ命からがら移住をし、その日の暮らしも困難な状態の中でも命を繋ぎました。

当時、すでに大人になっていた姉たちは私が生まれた時、口をそろえて「お父さんお母さんいい加減にしなさいよ。」と言ったそうです。

最近若い女性が「女性が赤ちゃんを産みやすい世の中になったら産みます。」と言うそうです。嘘だと思います。母は、戦争中も二人の兄を平気で産んでいるのです。

誕生日にお祝いをしてもらう人が多いでしょう。私は、これは間違いだと思っています。自分という人間をこの世に送り出してくれた両親に、感謝する日ではないかと考えるからです。

特に母親は、その日自分の命を失うかもしれないという状況の中で産んでくれました。父親だって我が子が生まれる日は朝から仕事も手につかず、ひたすら無事な出産を祈って

いたはずで。そのような両親をわきに置いて自分一人で生まれたような顔をして、お祝いをしてもらうのはおかしいのではないでしょうか。

人は、永久に生きることはできません。命には限りがあります。しかし人は、永遠を求めます。そのためには親から子、そして孫へと命を繋がないけません。日本人はこう考えてきたのでしょうか。どんなに困難な状況であろうと命をリレーする。私の両親はそのことをしていたのです。今、このように考えるのは少数でありましょう。戦後、『個』を大切に考えるあまり、伝統的に日本人が重視してきた『命のつながり』が軽視されるようになってしまいました。残念なことだと思います。

結婚に対する考え方も大きく変化したように思います。かつて、女性は二十四歳までに結婚しないとクリスマスケーキと同じで売れないよ、というようなことを言いました。若いころずいぶん惨いことを言うものだと言われたのを思い出します。しかし今は結婚したいと思った時が適齢期、と言います。どちらが良いのでしょうか。確かにクリスマスケーキに例えるのは理不尽だと思います。しかし結婚したいと思った時が子どもを産む

には適さない年だとすると命を繋ぐことはできません。女性の二十代というのは出産には最適な年齢なのです。

丈夫な赤ちゃんが生まれる確率が一番高い時なのです。それを知っていてクリスマスケーキを引き合いに出しているとしたら、先人たちの言いかたにも耳を傾けても良いのではないのでしょうか。高齢出産での辛い話に接することがあります。何事にも最適の時があります。その自然の摂理には素直に従ったほうがよいでしょう。先人の知恵を今一度見直すことも大切であると思います。

母親は、九十五歳まで長生きをしてくれました。二十年前、彼女を見送った日のことを思い出します。九人の子ども、孫たち、ひ孫たち、それぞれの配偶者も入れると五十人ほどになりました。一組の男女からこれだけの子孫が出来たのです。見事に命を繋ぎました。素晴らしいことではないでしょうか。

この島国で日本人は、子孫が栄えることを第一に願いながら暮らしてきたのです。そう考えてくれたから、今我々はこうして生きているのです。

有り難いことではないでしょうか。そう考えるなら祖先の願いを受けて、次の時代に祖

先の命を繋ごうではないですか。きっとご先祖さまは喜んでくださるはずです。命をつなぐことは、それができる健康な者には「義務」なのではないかとさえ私は考えているのです。

我が国の人口は、今減り続けています。生まれる赤ちゃんよりも亡くなる人が多いからです。私が宮司をしている神社では氏子さんの数がここ二十年ほどで一、三〇〇世帯から一、〇〇〇世帯になりました。氏子さんが数人という神社もあります。

由々しき事態ではないでしょうか。

一人の神職としてできることは限られているかもしれませんが。しかし黙っているわけにはいきません。ご先祖さまたちは懸命に命を繋いできてくれました。そのお蔭で私たちが人生を楽しむことができるのです。そのことを是非思い起こしてほしいと思っています。

(千葉県 熊野神社 宮司)

アインシュタインの神観念

小 倉 雄 大

アインシュタインといえば「二十世紀最大の天才」とも称される物理学者です。「相対性理論」「ブラウン運動」「光量子仮説」など多くの理論を世に発表し、後の科学界の発展に大きく貢献しました。これらの理論の名前くらいは聞いたことがあっても、内容が高度過ぎて、理解が遠く及びませんが、彼の持つ「神」に対する価値観にはとても興味深いものを感じました。そこで本日は「アインシュタインの神観念」などというはなはだ身に余るタイトルではありますが、皆様にお話をさせて頂きたいと思います。

まずはアインシュタインの生い立ちから簡単に述べさせていただきます。アルベルト・アインシュタインは一八七九年、ドイツでユダヤ人の両親のもとに生まれました。彼はもともユダヤ教・キリスト教の神を熱心に信仰していました。それと同時に彼にとって大きく興味を引いたものがありました。それが科学や数学の世界でした。彼は幼少九歳の時

に「ピタゴラスの定理」に出会い、独学でこれを証明したと言われております。そんな彼はあるときダーウインの「進化論」を知りました。それは旧約聖書にある「神は土の塵から人類を創り給うた」の一説と矛盾していることを示していました。そこから彼はユダヤ教やキリスト教ではなく、科学の世界にのめり込んでいったと言います。「進化論」やコペルニクスの「地動説」が提唱された当時、宗教界や政府などから多くの批判を受けたように、科学と宗教は相容れないともよく言われます。アインシュタインも「神という言葉は私にとって全くの無意味だ」と言い放っています。ですが一方で「私は無神論者ではない」とも言っています。では彼はどんな神を信じたのでしょうか。それが彼と同じユダヤ人の哲学者・スピノザの唱えた「汎神論」という説でした。

「汎神論」とは「神即自然」とも表され、私たちの住むこの宇宙の物質や現象を形作る自然法則。それ自体が神であるという説です。例えば私の指や爪やそれらを構成する細胞までも全て私の一部であるように、この宇宙に存在する自然や現象、生物、もちろん人間も含めて全てが神の一部であるという考え方です。ご存じの通り、この地球の生命の存在は、「単なる偶然」の一言では説明がつかないほど、とてつもなく低い確率のもとにあります。よく用いられる表現として、百メートルプールの中にバラした腕時計を入れて無作

為にかき混ぜ、再び腕時計が完成するほどに低い確率といわれます。このような宇宙が存在すること自体が絶対的な神という存在の証明だ。という考え方が「汎神論」の根幹にあり、合理的なアインシュタインらしい神の捉え方であると言えるかと思えます。

この宇宙や自然を神とする捉え方を初めて聞いた時、私は神道の価値観に深く通ずるところを感じました。

日本では古くから太陽や岩や木や川などの自然物のもとより、人が使用する建物や道具などの人工物に至るまで、森羅万象・万有万物。あらゆるものに八百万の神様が宿ると考えられてきました。これが神道の最も古くからある観念です。この世界を形作るあらゆるものを敬い、命を受けたことや恵みに感謝し、時に畏怖し、古代より現代まで祈りを捧げ続けてまいりました。これが日本人の「おかげさま」「おもてなし」「もったいない」などの優れた国民性を培ってきたとされます。

科学は自然現象の様々な謎を解き明かしてきました。その中には神の仕業だと信じられたものも数多くあります。そんな科学が発達した現代ですから「神様なんて信じない」「神などいない」という人が私の周りにも多くいます。でもそれは「人間は優れた存在だから何もせずとも神が導いてくれるのだ」という人間本位な前提のもとにあるのではないで

しょうか。

確かに、国や文化が違えば神の捉え方も違いますから、全世界中の人々が同じの神を信じられないことは仕方のないことです。ですが、この壮大な宇宙の中で生きるちっぽけな私たちが、こうしてこの世に存在している。この奇跡を思えば、それだけで宇宙や自然をはじめとして、ありとあらゆるものに謙虚さや感謝の念が自ずと湧いてくるはずです。それこそが我々日本人が神道を通して、そして、アインシュタインやスピノザが「汎神論」を通して観た神の姿なのではないでしょうか。

「アインシュタインの神観念」などと大それた題名でお話をさせていただきましたが、結局「感謝」「謙虚さ」などごくごく当たり前なお話になってしまいました。ですがこの当たり前の感覚こそ、得てして忘れてしまいがちで、でも決して忘れてはならない重要なことだと私は考えます。「二十世紀最高の天才」と世界から称賛を受けたアインシュタインですが、彼は「神の前では人間は等しく賢く、等しく愚かだ」という言葉を遺しています。人が皆、彼のように謙虚であれば、より良い世界が訪れることでしょう。皆様も「ありがとう」「おかげさま」という感謝と謙虚な真心を以て、国の隆昌と世界の共存共栄を目指して参りましょう。

掃除をするという事

熊谷 昭

こんにちは。みなさん、掃除してますか？今日、私は掃除のお話をさせていただきます。

私は、他業種で長く仕事をした後に神職階位を取得させて頂き、この世界に入りました。そのきっかけの一つが、私が奉職させて頂いている椿大神社の朝夕の境内掃除の様子です。私は、長く参拝する側として椿大神社に通わせて頂いていたわけですが、例えば、夕暮れ時に訪れれば、鳥居の向こうに神主さんが参道を掃いているのが見えて来ます。参道に踏み入れると、参道の砂利に神職が丁寧に掃いた跡の畝が綺麗に続いています。少し申し訳なさを感じながらも、砂利を踏みしめ、参道を進んで行くと、竹箒を持った神職さんが、丁寧に挨拶をしてくれます。普段無愛想な私も、思わず挨拶を返しながらご本殿へと向かいます。

幾度となく参拝させて頂いた際に、この参道の一時が、自分にとってなんとも言えない大切な体験になっていると気づきました。

何年も、幾度も通おうとも、変わらぬこの境内の清浄さは、掃除をする神職さん達が、毎日たゆまず、淡々と丁寧に関心を込めて、ただただ普通に掃除をする事で保たれているのだと、気づいたのです。気づいてみると、その神社境内の清浄さという、一見ただ普通で、当然の事であるのにすごく特別で、心のこもった事であるのだと実感したのです。

さて、そんな私のかつての仕事仲間で、ちょっと強面の音楽プロデューサーがいるんですが、苦労をしながらも、だんだんと実力が評価されて、有名アーティストの曲も手掛けるようになりました。実力者ではありながら、なかなかヒットに恵まれなかった彼がトッププロデューサーの仲間入りをする、あるきっかけがありました。

もちろん、音楽の様々な研究や研鑽は当然なのですが、ある時彼は「掃除」を始めたのです。早起きして仕事を始める前に、まず家も仕事場を丁寧に掃除をする。掃除を終えて初めて仕事に入る。その徹底ぶりには決意のようなものを感じました。

結果が出るようになってから、彼がしみじみと語っていたのが「掃除の凄さ」です。

掃除をするようになってから、仕事の質が変わり、質が変わった事で良い作品が出来る。それを聴いた人から、やりがいのある仕事が来る。後は全力でやるだけだ、と。

ちよつと不良な見かけの彼が、真摯な眼差しで掃除について語る様は説得力があります。本気で掃除をする事、丁寧継続することで、生活だけでなく生き方もアップデートしたのだと感じました。

ところで、境内清掃に関する歴史の話でちよつと面白いなと思っていた話があるのでお伝えします。

壬申の乱を経て、天武天皇が律令の制作を開始する六八一年、同時に神社造営の詔も発します。全国と言っても限られた範囲ではあったようですが、造営した神社に対して、その後朝廷は「掃除しなさい」という指示を出したそうなんです。『続日本紀』で確認出来る七〇六、七二五年の詔は、確かに境内空間を掃き清めて清浄に保ちなさい、という指示に読めます。(拙い私の読解力での解釈になりますので、間違いなどありましたら、何卒、ご指摘、ご指導のほど、よろしくお願い致します。)

神祇を祀る神社の在べき様は、まず第一に清浄であること、その清浄さを維持し、清浄

な社で祭祀をなさいという、という詔。様々な歴史的な背景があったようですが、神社の神職に、オフィシャルに課せられた最も古い役割が「神社の掃除をする」という事であったというのは、なんだか素敵だと思いませんか。

さて、私達神職にとって、掃除というと、やはり「祓え」を連想します。

日本の神話では、穢を祓う事で、何かが生まれるというモチーフが繰り返されます。

最も知られているのは、伊邪那岐命の禊の場面です。伊邪那岐命が穢を祓うと、次々と、自然界を構成する神々が成ります。その最後に、三貴神という、私達の世界を司る神様が成るのです。祓えの力って無限です。

ちなみに、この禊では、祓えに関わる重要な神々、禍津日神とその禍を直す神である直毘神も成ります。禊の清浄な水の流れが穢れを洗い流し、正常を取り戻すのが祓えなのだと思います。

日本の神話における祓えで、もう一つの決定的な場面は、素戔嗚命が祓えを受け、地上に降り立つ場面です。素戔嗚命は、農地を荒らして農作の邪魔をするんですが、これは天津罪と言われます。その後、祭祀の原型とされる天岩戸開神話が有名ですが、今回は、世

界に天照大神の光が戻った後、素戔鳴命が罪を祓われ、地上に向かう場面に注目します。一般の神話好きの人でも、この素戔鳴命の祓えのシーンは読み飛ばしがちですが、ここは、私の大好きな祓えの力を伝えてくれる場面です。

祓えが済んで清浄になった素戔鳴命の地上での大活躍はご存知の通りです。

スサノオさんは、高天原で犯した天津罪を、自ら贖罪するかのように、農業の敵、八俣の大蛇を成敗します。

祓えが素戔鳴命にもたらした変化は、出雲地方で水害を解決し、灌漑の技術をもたらし、やがて大きな発展へと繋がっていくと夢想してみると、祓う事は、スサノオさん本人が清々しい家庭を築いて幸せになったただでなく、社会全体に幸福をもたらした、と言えるのではないのでしょうか。

日本の神話が伝えるこの祓えの力というものは、ただ力を得てご利益がある、つていうのとはちょっと違いますよね。

祓えによってもたらされる変化は、誰かの為になる時にこそもたらされるものだと思うんです。

祓えが持つ不思議の力とは、誰かの幸せに繋がる力。私達個人が願う幸せが、誰かの幸せに繋がる時、その時初めて「ご利益」も生まれるのではないのでしょうか。そんな幸せの掘み方が出来たら素敵ですね。

現代を生きる私達にとって最も身近な祓え、それが、「掃除」だとすれば、今日、私達が掃除をする事が、もしかしたら明日、誰かの為になっているのかもしれないですね。

神職にとっては境内や社を清浄に保つ事は当然の務めですが、一般の方にとっては、自分の家、部屋、作業場、仕事場、そこがそれぞれの境内ですから、掃除をするという事は、目には見えないですけども、自分や家族や家を守ってくださっている神様にお仕えする事でもあると思うわけです。

という事で、幸せを願う時、その幸せの第一歩に掃除あり！というお話でした。さて、今日のお掃除するモチベーションがグッと上がってきました。

芝 幸 介

本日はようこそご参拝くださいました。それでは御祈祷の前に一言ご挨拶をさせていただきます。

私事で恐縮なのですが、実は、春休みに家族で旅行に行った時の話です。帰りの飛行機の機内で下の娘が小学校四年生なのですが、初めて飛行機に乗ったので、機内でトイレに行くのに、一緒についていったんですね。トイレは使用中で、その前に小学校五、六年生くらいの女の子が待っていました。その後ろに私と娘が並んだら、その女の子がパツと振り返って、穏やかな表情で私と娘へ向かって「お急ぎですか」と声を掛けてくれました。小学校高学年くらいの子供が、同じくらいの年齢のうちの娘に對して、そんな氣遣いを、そんな言葉を掛けてくれるなんてと、すごくビックリして、同時にすごく心が温かくなつて、言葉に神さまが宿ってるなあと感じして、わたしはその子に「大丈夫です。ありがと

う」と言いました。

そのあと、空港に到着しスーツケースを受け取るため待っていたら、その女の子も近くで待っていたんですね。わたしは妻に「実はさっきトイレに行ったら、あの女の子が前に並んでいて、振り返って「お急ぎですか」って声をかけてくれたから、すごく感動したわ」という話をしたんです。で、そうこうしているうちにスーツケースが流れてきて、その女の子は保護者が近くにいなかったんですが、大きなスーツケースを自分一人でベルトコンベアから担いで取り出していました。それを見て、やっぱり人間ができた子は何も言われなくても自分の荷物は自分で率先して取りに行くんやなあと、妻と一緒に感心して見ていました。そこで、ふと、うちの娘は何をしていんのかなと、後ろを振り返ると、ベンチに座って一生懸命携帯を見てました。まあ、それが普通のことなので、それはそれで仕方ないとは思ったんですが、どうやったらあの女の子みたいに思いやりのある子に育つんだろうと、何が違ってうちの子はこうなったんだろう。いや、別に否定をしているわけでは有りませんよ。うちの子もほんとにいい子なんですよ。ともかく、非常に感動して心が温かくなる出来事がありました。

それで私は思ったんです。この女の子の「お急ぎですか」という、たった一言ですが、

言葉にはすぐく力があるなど。そして同時にこの女の子は、人をこんなに感動させることができるという事で、勝手に私の人生の師匠と呼ばせていただく事になりました。師匠といつても、私が一方的に思っているだけで、認められてはいないんですけどね…。

人生には様々な場面で、人としての道を教えてくれる方に出会う事によつて、自分自身が成長できるきっかけを与えていただけると思っておりますが、そのきっかけを与えてくださる方というのは、年齢や性別・肩書というのは全く関係なく、私の場合はその女の子が師となりました。

それでは、言葉の力という事に関連してお話しを致します。神社では祝詞を奏上して、神さまに感謝や願いを申し上げますが、祝詞のような昔の言葉には、不思議な力、物事を実現する力が宿っていると日本では古来より信じられてきました。神道では八百万の神様というようにあらゆるものに神様が宿っている、水には水の神、火には火の神と同様に、言葉にも神さまが宿り、つまり言葉が存在すると信じられてきました。

ただ、言葉といつても、言葉を発したから叶うというわけではなく、そこには必ず強い想いや、祈りの心構えがあつて初めて言葉が宿り、物事が具現化、願いが実現される力を与えてくれると思います。

千三百年前の歌集・万葉集にも、大和の国は『言霊の助くる国』、あるいは『言霊のさきはふ国』という一節がありますが、これは、「言霊の力で物事を良い方向に動かし、人の心を動かし感動させる、大和の国、日本はそういう国だ。」ということが歌われておりまして、古来より私たちは言葉の力を信じて、言葉に対する崇敬の気持ちを持ってきた民族であるわけなんです。

ということとは、普段私たちが使っている言葉についても、神さまを大切にするように、御札も大切に扱うように、言葉も大切に使わなくてはいいけません。一度口から出た言葉は二度と戻ってきませんので、汚い言葉を使ったり、良い言葉でも気持ちが入ってなかったら、言葉の神様に対して申し訳ない、そういう謙虚な気持ちで責任と自覚を持って言葉を発していく事が肝要だと思います。

ですので、一番大切なことは、この女の子のように、言葉に真心をどれだけ込められるか、どれだけ真心を込められる人間に、自分自身が成長できるかだと、今回改めて実感することができました。しっかりと想いや祈りを込めることができれば、言葉が言霊を宿して、人の心にも、神さまの元にも届いて、感動させたり、物事を良い方向へ動かしてくれるものだと思っております。

私は神職として、神さまと皆さまとの間を取次ぐという、重要なお役目をいただいておりますので、祝詞を奏上する際には、皆様から託された願いが叶うよう真心を込めて祈願させていただくのは当然の事ですが、当神社の御祈祷では、プラスアルファとして、祝詞が神様のもとへ届くように、そして、ご参列の皆様にもしっかりと届くように、元氣よく力強く祝詞を奏上することも大切にしております。

それでは、これより御祈祷の祝詞を奏上いたしますので、皆様もどうぞご一緒に心の中で念じていただき、言霊が神さまに届き、念願が成就されます事をお祈り申し上げます。

(三重県 椿大神社 権宮司)

海を越える和の心

真庭孝雄

皆さま本日は朝早くからお掃除、そしてお参りをいただき誠にありがとうございます。本日は十二月二十五日、納め天神の日でございます。道真公は六月二十五日にお生まれになられ、二月二十五日にお亡くなりになりました。そのことから毎月二十五日は天神さまの縁日とされ、一年最後の縁日である今日が、納め天神として全国の天神さまでお祭りをされております。

ただなかなか一般的には広まっておらず、特に子供たちは今日は違う日ですね。うちの息子も家の神棚が飾りつけられているのを見て、「あ！今日はサンタさんのお祭りの日か！」と言う始末であります。まだまだ親の教育が足らん、日々反省をしているところでございます。

年末年始の今からの一週間、日本が一番日本らしい一週間かもしれません。クリスマス

を家族で過ごし、年末はお墓掃除と除夜の鐘を聞き、年明けはお宮へ初詣。神社にお寺にキリスト教に、日本人のおおらかな性格が表れる年末年始でございます。

他の国を見てみますと、宗教の違いはすなわち戦争です。しかし日本では、昔からお宮の中にお寺があつたり、お寺の中にお宮があつたり、また日本で初めてできた教会はここ山口にあります、とても宗教に関してはおおらかです。

これはすなわち、日本人が大切にしてきた神道の心であります。神様はお一人ではありません、八百万、様々な所に神様がいらつしやる。そしてそれを統べる天照大御神さまは、弟君である須佐之男命が神様の世界で大暴れをした際は、何度もそれを許されました。色々な神様が来られようが、この日本ではみな神様の世界「高天原」の神々の一部。様々な文化におおらかで、そして一度や二度の失敗は許すという精神が、この神話から日本人に根付いているのです。

令和元年三月二十八日、私は韓国の地にいました。皆さま青年会議所というのをご存じでしょうか。地域の四十歳までの青年たちの団体で、地域起こしやボランティア活動などに励み、夜は飲みに関わる団体です。私はその青年会議所に所属しており、令和元年は青少年育成事業の担当委員長でありました。その担当した事業の中に、山口市と姉妹都市提携

をしている韓国の公州という町との中学生同士が交換留学をする、というものがあり、その打ち合わせで韓国の公州にやってきた訳であります。

私をその担当に拝命した会長に、私は当初「大丈夫ですか、私神職ですよ。あまり韓国が好きではないんですが……」と言いました。するとその会長は、「いや、今後海外の人と交流する山口の学生に、日本の歴史や文化、日本人としての誇りを持ってもらいたいから君を選んだんだ」と言われ、まんまと騙されたわけでございます。

そんな中、韓国に苦手意識を抱いたまま公州に到着し、準備や会議はスムーズに行われ、夜の懇親会の時間となりました。その場には公州JCのOBもあり、大人数での歓待を受け大宴会。挨拶に回っている途中、OBの席の中で一番奥に座っている六十歳くらいのドンのような方がおられました。少し怖いな、と思いながらもお酌はしないといけません。恐る恐るお話しをすると、なんと向こうから日本語で話しかけられました。そうなる会話はいしやしいものです。JCのこと、山口のこと、色々と話中で、私のスマホの中にある山口の写真を見せていると、不意に私の神主の姿の写真が出てきてしまいました。

「しまったー」そう思いました。

なぜか。私は韓国に渡る前、山口の先輩から、「真庭君は神職というのを隠した方がいい。

古い韓国人はそれを嫌う人も多いから」ということを聞いていたからです。

そのOBの方はぎろつと私を見ながら、「君は何の仕事をしているの。」

そう問われました。もう隠しても仕方ありません。私はもうどうにでもなれという気持ちで堂々と、「私は神社の神職をしています。」そう答えました。

怒られる、そう思ったのも束の間、そのOBの方は急ににこやかな表情となり、「私は君のような神社の神主さんに出会いたかった！本当に良かった。実は私の父は、戦前この地にあった公州神社の神職だったんです。」

実は戦前、日本が朝鮮や台湾など統治していく中で、神道の精神をもって国民を一つにしようと、外地に神社を数多く建て、日本人の宮司が派遣をされていきました。そして、この方は公州にあった公州神社にて、日本人宮司の下で奉仕されていた神職の息子さんだったのです。

それからはその方の話は止まりません。

「今の韓国人は誤解している、神道の八百万の神々という考えがいかに素晴らしいか。宗教間の争いが絶えないこの世界で、日本は常に他国の宗教を尊重し、迎え入れ、そしていつの間にか日本の神様となる。その根本である神道を学び、神職となれて誇りに思う。」

父はそう常に言っていました。

また、私の家には先祖を祭る儒教の祭壇があるんですが、本当は神職になった時に神道式に変えなければいけなかった。しかし愛着がありなかなか変えられずにいたとき、その宮司さんがたまたま家に来て見られてしまった。するとその宮司さんは、「そのままいいよ。ご先祖様をお祭りするその心が大事なんだから、しっかりお祭りを続けて、段々と変えていきましょう」と優しくおっしゃられた。形ではなく我々現地の人間の信仰の心を認めてもらったことにまた感動し、直後うちの祭壇は神道式になったんです。

私は神職であつたことに誇りを抱いていた父からそのことを聞いて、いつか日本の方と神道について、日本の心について直接聞きたかった。しかし、戦後は日本人なのにそれを知らない人が多くてとても寂しい。だから、いつか神主さんとお話がしたかった。日本人が天照大神を、天皇さまを中心として連綿と続くこの神道の心を知らないようではいけません。どうか、韓国人でもそう思っている人間がいるということを、忘れないでください。」

私は自分を恥じました。出会ってもない海外の人の悪口を言っていた私に対し、八十年前、海を渡った遠い異国の地で、天照大神そして天皇様という一本の大きな柱を中心に、異なる宗教や文化を尊重し、認め合い共存していこうという神道の和の心を説いた神職が

いたことを。

我々現代人は皆知らないだけなんです。多様性、多文化共生、ダイバーシティという素晴らしい価値観が西洋からもたらされた。馬鹿言うな、それは日本人が二千年以上も前から大切にしてきた、神道の和の精神そのものです。そしてこの心は、私たち日本人が世界中の人々に広げなくてはならない。そう思った韓国の夜でございました。

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

明治天皇さまのお歌であります。私たち一人ひとりにできることは少ないかもしれませんが、神道の心をもつて世界の平和を説いていこうではありませんか。皆様が清々しい心で新年をお迎えになりますことをお祈りいたします。

それでは、今からは参集所にてお直会をいたします。直会までが神事です。どうぞそのままご移動くださいませ。ご清聴ありがとうございます。

(山口県 古熊神社 榎宜)

熊野の神様

松 田 真

熊野大神とは、和歌山県の熊野三山に祀られる神様です。

熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社を総本宮として全国に四七〇〇社以上祀られる神社があります。

御祭神はイザナギ尊、イザナミ尊、スサノウ尊です。

当社は熊野本宮大社と熊野速玉大社より御分霊を賜り、同じ神様をお祀りしています。

「伊勢に七度、熊野に三度」といわれるように中世には皇族貴族から武家や庶民に至るまで、幅広く開かれた聖地とされました。

とくに、熊野詣は庶民の間では念願の一つであったとも言われています。

当社も毎年五月十二日から熊野三山の御礼参りの団体旅行を行っています。

バスを借り、門司港からフェリーに乗船し泉大津港に下船、熊野三山を詣でます。

以前は熊野三山、伊勢参りでしたが、神宮の境内は広く、高齢の参加者には年々歩けないということ、ここ十数年は熊野詣でのみとなっています。

今年は五十三回目でした。

五十一回目の年はコロナ禍で断念しましたが、翌年には総代、百姓会と少人数にて続けることができました。

この度の五十三回目の熊野三山詣では参加者を募り二十名の皆様とご一緒致しました。最高齢の方は九十八歳です、半数は八十歳以上の方々のご参加を頂いておりますが、皆様とてもお元気です。

熊野三山にて正式参拝をさせていただくこと、宮司様方を通じて熊野のすばらしさを感じることが出来ます。

そして何より熊野は自然の中に神々を感じることが出来ます。

熊野の山々、山から流れ落ちる滝、清らかな川、大きな磐座、太平洋の海、熊野の雨や霧、この熊野の地でしか感じられない感動があります。熊野は蘇りの地と言われます。

昔の方々はここを歩いて詣でたのですから、少しは私も歩かなくてはいけないと思います。

熊野の語源は諸説ありますが、一、鬱蒼とした、奥まった土地であること。二、神の坐すところ。三、死者の隠るところといった土地を意味しているといわれます。

当社の境内には菩提寺山と言われる山があります、歩かなくてはいけないと思いますから、時に山に上がってみます、大きな磐座が点在しています、摩崖仏があり、大きな岩に彫った観音様です。いつ誰が彫ったのかは、分かっていませんが、作られた理由は分かっています、それは信仰です。

この山は熊野の語源に等しいと感じられます。

初代宮司は「この菩提寺山に熊野の神様が鎮まる、滝が所望」と神を感得したのです。

そうして、この何もない山に仮のお社が建立されました。全国の熊野神社の中で最も新しい時代、昭和四十七年に創建され、庶民が開いた神社となったのです。この地に熊野の神様をお迎えしお祀りした初代の御心を受け継ぎ伝えていくことが何より大切なことだと思っています。

では、何が大切なのかと申しますと熊野大神様に喜んでいただくこと、お喜びいただくためにどうすればよいのか、ということだと思っています。

当初は仮社殿の創建から少しずつの積み立ての寄付を募って、ようやく平成二十六年に

本殿を建立しました。

境内は常に清々しく神様に気持ちよくお過し戴く為に掃除をします。

毎月一日は奉仕の日と決めて、皆様と境内の清掃に汗を流します。

神様に御供えするお米を作り、神様にお酒や季節の品々を御供えして、毎日お祭りをします。

月毎のお祭りには、普段のお供え物に加えてお餅や鯛なども御供えします。

茶席奉仕の方々がお抹茶を奉納され、巫女舞や時には地元伝承の神楽や盆踊り、合気道や太鼓なども奉納され、参拝者の皆様とともに神様に祈りの誠を捧げます。

その御供えを下げて直会とし皆様と共に戴きます。

直会までが祭りと賑やかに愉快的な良き日です。そのお祭りを支えて下さるのは崇敬者の皆様です。

特に百姓会といって、毎日のように上がっては神社の田んぼや畑、しめ縄づくりや年中行事の準備、境内整備など奉仕をして下さる方々がいらっしやいます。

また、畑に植える玉ねぎやさつま芋、ジャガ芋の種を奉納して下さる方がいます。

そして、それを植える奉仕の方々がいらっしやいます。毎年沢山の収穫を喜び、熊野三

山へ奉納致し、大前に御供えします。

初代はいつも「運べよ、尽くせよ。」と申しております。

昔から神社には奉仕の方々が上がっては、それぞれに出来る事を奉仕して下さいました。そしてその神様のおかげを戴かれる皆さんはとてもお元気です。

おくまった山に鎮座する神社ですから、市内でも知らない方々も多くいらつしやいます。道路沿いには、ヤタガラスの絵が描かれた看板を立てています。

山陽小野田市はサッカーJ2のレノファ山口というチームのホームグラウンドがあります。そのサッカー場で学生の全国大会などが開催されるとその保護者の方々が応援に集まってこられます。その方々は八咫鳥について、日本サッカー協会のシンボルマークとしてよくご存じです。

八咫鳥は神武東征伝で、初代天皇、神武天皇様を熊野から大和まで導いてくれました。導きの神、勝利に導くともいわれ全国の熊野神社には八咫鳥の御守りがよく頒布されています。

熊野三山の八咫鳥の絵はそれぞれに違います。当社は、熊野本宮大社の八咫鳥の絵を使わせて頂いています。

この菩提寺山に令和四年、創建五十年の奉祝を迎えました。その記念として、画家の平野杏子氏に八咫鳥絵をデザインしていただきました。

この平野杏子氏は摩崖仏の絵を専門に描かれており、昭和五十五年、摩崖仏の取材にこの地を訪れたご縁で、当社を永く崇敬して下さっています。現在九十三歳です、昨年沢山の八咫鳥の絵をご奉納戴き、その絵を御守りや絵馬、御朱印などに使わせていただいております。

平野杏子先生は「この絵をつかって、神社を守っていかなくてはいけませんよ」とおっしゃいます。

神様のお鎮まりになる山を御守すること、今はそのお役目を戴いている当社、神様が結んで下さった皆様と共に神様に喜ばれるように日々励むことが大切なのだと思います。

『世のため、人の為に尽くすこと』神様に喜ばれる生き方をするを常に心がけるとまた熊野の神様が迎えて下さるのだと思います。

全国熊野会という会があり、全国の熊野神社が集まり総会が開かれます。

今年は熊野本宮大社で第十五回総会が開催されます。そして、来年は当社にて、全国熊野会の開催が予定されています。きっと、これは毎年五十三回も熊野詣を続けている神様

からのご褒美なのだと思います。

熊野の神様をこの地でお祀りし、神様にお喜びいただくことによって、神様は皆さんを力づけ見守って下さっているのです。

この熊野の神様を私もここでお守りし祈り続けたいと思います。

（山口県 熊野神社 権宮司）

嗚呼、沖繩 ― 敬神・崇祖・尊王の島

大山 晋 吾

〈敬神・崇祖・尊王の島〉

今年で、私が靖國神社から波上宮に転任して十一年目となりますが、東京にゐた頃は全く沖繩の事を知らず、テレビで米軍基地反対の市民集会の様子等を見て、何と左翼的な島である事かと思つてをりました。しかし、沖繩に赴任致し、全くそれが誤解であつたことに気付きました。人々は皆々、ご先祖を大切にし、神々を深く信仰してゐます。実に敬神・崇祖の念篤く、剛毅にして純朴なる、誇り高き氣性が県民に漲つてゐました。特に、県民の神社参拝の長さには驚かされました。若い方々でも三分、五分と祈つてゆかれるのです。また、その時間帶も夜、夜中にまで参拝される方がをられます。深夜に境内を見廻るので、特に清明祭（シーミー）の頃などは、薄暗い中に黙々と家族親族で座つて祈りを捧げられてゐます。更に、台風が来て、空がうなり、折れた木々の枝が飛びかふやうな危険

な中でも、お参りにみえる方もある程です。また、先祖を敬ふ県民性は、墓所・墓石の多い事に象徴されます。丘や山に登れば、必ず墓所があります。それも膨大な数で、その内に生きた人の住む所が無くなつて仕舞ふのではないかと思へる程です。人々は清明祭になると一族門中で先祖伝来の数々の器に御供へ物を盛つてお墓参りに行きます。そこで子孫は、親たちの姿を見て、自然に崇祖の心を養ふのでせう。

〈日本一の提灯行列〉

沖縄の敬神崇祖の県民性をご理解戴けたかと存じますが、私は、その敬神・崇祖に更に「尊王」を加はへたいと思ひます。それは、十一年前、私が沖縄に赴任致した年の十一月に行はれた提灯大パレードに明らかところです。平成二十四年十一月、全国豊かな海づくり大会に天皇皇后両陛下が行幸啓遊ばされ、御滞留四日間、沿道等にご奉迎申し上げた県民約四万一千名、そして十八日夕刻、那覇市で行はれた提灯大パレードには七千名の県民が提灯を持ってご奉迎申し上げてゐます。都心であれば七千の数も可能でありませうが、地方に於て、それも島国の沖縄に於て七千人が集つたのです。まさに日本一の提灯大パレードでありました。その当日、提灯と日の丸の小旗を持った人々は、国際通り沿ひの緑ヶ丘公園から、奥武山公園の国場川河畔まで、天皇陛下萬歳を三唱しつゝ、パレードを行ひ、夕

闇の中、国場川河畔より、対岸の両陛下のご宿泊先である某ホテルに向かひ、遙かに提燈を掲げて天皇陛下萬歳を何度も三唱申し上げました。同ホテル九階の御宿泊所からは、両陛下のかざされる御提燈の燈火がかすかに拝され、皆々感激のうちに声をからして萬歳を三唱し続けました。大御心と沖繩の心が一つになった瞬間でありました。また、特筆すべきは、国場川にハーリー船を浮かべ、岸には何処もの美しい旗頭が、大勢の旗持に支へられて翻り、鮮やかな紅型の衣装をまとった女性達は琉舞を舞ひ、勇猛な空手家達は演武を行って両陛下をお迎へ申し上げた事であります。沖繩県民が沖繩の心で以て、古来よりの琉球芸能や武道で以て、精魂籠めてお迎へ申し上げた。ここに大きな意義があらうかと思ひます。仏作って魂入れずと申しますが正にこれによりご奉迎に魂が入りました。沖繩の二大新聞は、オスプレイ反対、辺野古移設反対等の報道ばかりですが、内実は敬神・崇祖・尊王の篤い思ひを抱かれた方々が県民の大半なのです。

〈日本一の愛国県〉

戦前の沖繩もまた、日本一の愛国県でありました。当時、沖繩のすべてのご家庭には、御真影が掲げられてをりました。そんなのは、日本本土でも同様だと思はれるかもしれませんが、当時の沖繩には、特に若い世代には、愛国の心が漲つてをりました。それは、大

田中將の訣別電文を見ても明らかところです。米軍は僅か数週間で沖縄本島を占領できるものと見てゐましたが、沖縄は軍民挙げてこれと戦ひ、三か月の間、祖国の防波堤となつて持ち堪へました。その間、鉄血勤皇隊の当時十四、五歳の生徒までもが急造の爆雷を引提げて戦車特攻を敢行してゐるのです。米国は、沖縄本島西海岸の嘉手納辺りより侵攻して参りましたが、日本の戦車特攻を受け、特に前田高地辺りでは、キャタピラが切れ、格坐した米軍戦車がころころ転がつてゐたと云ふ報告も残つてゐるのです。米国は戦車の中々前に進めることが出来ませんでした。沖縄県民はとにかく最後の最後まで実に粘り強く戦ひました。為に米軍は、その後九州や南関東上陸の計画もありましたが、結局、沖縄の抵抗の激しさを目の当たりにして、それらを断念せざるを得なかつたのです。

〈尊皇・愛国の花と咲き誇る〉

そして、この戦前・戦後と続く沖縄県民の敬神・崇祖・尊王の根は、未だ朽ち果てる事無く沖縄の土壤に息づいてゐます。だからこそ、ひと度、陛下の行幸を仰げば、あたたかも慈雨が乾いた大地を潤し、緑の木々や花々を齎すやうに、忽ちにして七千人のお提灯を持った人々がご奉迎に集ひ、尊皇・愛国の花と咲き誇つたのではないでせうか。

国防についての一考察

戦艦大和特攻を例として

伊 藤 彰 教

私は軍艦模型を趣味としており帝国海軍の艦艇を中心に模型を製作しております。十数年前のある日、参拝者休憩所に飾らせて頂いていた私の模型作品について尋ねてこられた参拝者の方がいらつしやいました。その船の模型は「戦艦金剛」（その模型は現在大阪府千早赤阪村に御鎮座の建水分神社に在ります。）だったのですが、模型を見られたご年配の参拝者が「この船はよう出来とる。この模型の作者に会いたい」と所望され、私が呼ばれて参拝者休憩所に赴いたわけですが、降りていくと、長身の背筋が伸びた姿勢の美しい紳士が立っておられ、私に「私は大東亜戦争時、駆逐艦雪風に乗っていました、戦艦大和、武蔵、空母信濃の最期を見届けました。」と告げられ、戦史の研究に興味のあった私は、その瞬間驚きで背筋が凍ったような感覚に陥った事を覚えています。それがきっかけで、その方とは十五年以上にわたるお付き合いをさせて頂き、当時雪風での戦争の体験を

とても沢山語って下さいました。

その方は「野間光恵さん」昭和二年生まれ。昭和十七年、海軍特年兵制度の一期生として十五歳で海軍に志願、呉の大竹海兵団に入隊。約一年の訓練を受け、昭和十八年六月、輸送船で本土を出発。トラック基地を経由して、巡洋艦「阿賀野」に乗り、ラバウル港にて駆逐艦雪風に乗艦着任しました。配置は水雷課の水測員で、艦首に装備された、九三式水中聴音機が担当でした。雪風では各地を転戦し、マリアナ、レイテ沖、戦艦大和の特攻作戦にも参加し、戦後は警察官として活躍され、残念ながら昨年折しも八月十五日、九十五歳で御逝去されました。私は、野間さんから遺言で、私の海軍での戦いを語り継いで欲しいとの遺言を頂いておりますので、ここの講演講習会で語らせて頂く機会を与えられたと思います。それがこの標題を選んだ理由です。野間さんの戦争体験談はともたくさんございますので、今回はその中から、日本が作り上げた世界最大最強の戦艦「大和」の最期の状況を限られた時間ではございますがお話させて頂こうと思います。

時は昭和二十年四月六日。戦艦大和は沖繩に上陸しようとする米軍に一矢を報いるべく、軽巡洋艦「矢矧」以下九隻の護衛艦と共に出撃。豊後水道を南下、沖繩へ向けて進路を取りました。圧倒的な米軍の兵力に空からの援護のない僅か十隻の艦隊。全滅覚悟の海上特

攻作戦。まさに湊川の合戦で足利の大群に戦いを挑む楠木正成のよう、しかもこの作戦は「菊水作戦」と呼ばれた特攻作戦の一端。駆逐艦雪風はその中の一隻で、大和の左舷後方に位置し大和の護衛任務に当たっていました。

翌七日、情報は着々と米軍に伝わっており、敵の総攻撃は間近に迫っていました。野間さんもこの時は確実に生きて帰れないと、死を覚悟していました。

「旗艦大和より、敵の大編隊接近中の報あり。」と伝令。艦長が「総員対空戦闘用意。」と指示を出す。野間さんは通常は艦首水線下に装備された水中聴音機を担当していましたが、対空戦闘では聴音機は役に立たないので、艦橋に上がり、水雷長補佐として見張り役を担当することになります。当時の水雷長は斎藤国次郎大尉でした。

艦橋には、艦長寺内正道中佐、柴田正砲術長、田口康夫航海長等各課の長が集まり、艦の指揮を取っていました。野間さんは、艦橋で艦長を始め各幹部の会話を直に聞くことができ、戦闘の一部始終を見ることができる立場にいたわけですから、戦闘の状況を全て把握できたのです。

やがて敵機のプロペラ音が不気味に響いてくる。天候はすこぶる悪い、波も荒れている。空には黒雲が立ち込め（高さ約六百メートル）敵機の姿は見えない。「大和のでかい主砲

では有効な射撃ができません」と思っているうちに、敵機の姿が一機、また一機そして次々と現れ逆落としの様に突っ込んで来た。飛行機が見える頃には敵機は急降下爆撃の態勢になっていたのでこちらは後手にまわり、なかなか機銃は当たらない。天候が悪い事も影響して、こちら側としては完全に不利な戦いを強いられます。対空戦闘で、一番危険な場所にいたのは実は寺内艦長でした。艦長は唯一ヘルメットを被り、脚立の上に登り、艦橋の屋根のいい部が蓋のように開くようになっていて、艦長はそこから首を出して周囲全体を見渡しながら、航海長に操艦の指示を出すのです。正に丸裸です。

こちらは飛行機の援護が全く無いたった十隻の艦隊に米軍は延べ四〇〇機の飛行機で襲いかかって来たのです。攻撃はやはり大和に攻撃が集中しているので大和に次々と爆弾や魚雷が当たっているのが分かる。大和に迫り来る敵機に盾になるように大和に寄り添い敵機に機銃を撃ちまくる。必死の抵抗も虚しく正に鬬り殺し。映画でもあったけど、実際の戦闘は映画みたいに生易しいものじゃない。もっと壮絶で悲惨なものだ。と言います。

敵の飛行機も勇敢で、艦すれすれまで突進し機銃を撃ちながら魚雷や爆弾を放ってきます。何度か敵のパイロットと目が合ったそうです。

大和が傾き、速度も落ちて、艦の舷窓のあちこちから白い煙が立ち始めました。「これ

は艦の内部に火が回ったな、もう大和は持つまい」そう思った矢先、艦長が「航海長、大和がもうすぐ爆ぜる（誘爆する）から、近くにいると破片が降ってくるんで、大和から一旦離れるように進路を取ってくれ。」航海長「了解、取舵一杯。」この時、大和に最も近い位置にいた雪風は、大和から後方へ離れる形をとり、冬月とすれ違い、入れ替る形となる。そして大和を見た刹那、大和は転覆し、後部の短艇格納庫からブワツと真つ赤な炎と煙が噴き出したのを今でもはっきり覚えていると野間さんは大和の最期の姿を目に焼き付けその様子を語りました。「大和の風呂に入れてもらえたことが嬉しかったな。」「大和が沈んでしまった。とうとうこれで日本も終わってしまうのか」大和が沈んだ時、そう感じたそうです。

寺内艦長は「大和が沈んでも、雪風は単艦でも沖縄へ突っ込む」と息巻いていたが、司令部から作戦中止の命令を受け、大和以下沈没艦の生存者の救助任務に就くことになりました。

するとしばらくして、アメリカのマーチン飛行艇が降りてきて着水、墜落した米軍機のパイロットの救助を始めた。雪風から四五百メートルの至近距離。即、砲術長が艦長に具申しました。

「アメリカのマーチン飛行艇です。今ならあの敵機を主砲で撃破できます。撃ちましよう。」これに対し寺内艦長は「いや、撃つてはいけない。例え敵であっても、救助している所を攻撃するのは、吾が海軍の伝統精神に反する。」やがて救助を終えた飛行艇はゆうゆうと飛び上がると、駆逐艦涼月にバリバリと機銃掃射を浴びせ飛び去って行きました。「あの時に撃つておけば」悔しそうに砲術長は苦言を述べたが、艦長の命令に逆らうことは出来ない。寺内艦長は何も言わず、飛行艇の飛び去った空を見つめていた。「我々は負けた。けれども、海軍軍人としての誇りや魂まで捨ててはならない。」目の前で旗艦が撃沈されたにもかかわらず、このような命令を下す寺内艦長の人間性。これこそ、日本人の持つ武士道精神である。当時の海軍兵学校も、日本の武士道精神を徹底的に教えてくれたのだらうと思います。

こういう事は戦史には全くと言っていいほど書かれていません。

野間さんが、この戦争を戦い、死を覚悟したのはまだ十八歳の頃でした。当時、多くの若者が、特攻隊として空に、海に散って逝きました。野間さんは戦艦大和と共に雪風の艦上で死ぬ覚悟でした。その時のご本人の気持ちは唯一つ。家族、特にお母さんのいるこの日本を守りたい。この一念でした。母というのは、単に母親という意味だけではなく、故

郷、生まれ育った所という意味もあります。船の帰る港は母港、生まれ育った国を母国といえますね。母というのは特別な存在なのです。その母なる国を守るために当時軍人として命を捧げようとして戦った事は誇りに思っていると野間さんは言い残しています。この戦争を振り返って野間さんは、「日本の軍隊は世界一規律の執れた軍隊だった。九十年の人生のうち、海軍にいた五年間が、僕の人生のすべてだったね。」と言い残しています。

国防に関していえば、確かに戦争なんてするべきではありません。日本の近くには、周辺海域や、国土、国としての主権を脅かす国が確実に存在します。相手があつての戦争です。こちらからは仕掛ける事は無いにしても、相手次第でどうなるか分からないのです。備えが必要です。自分の国は自分で守るという体制を整えなければならぬと思います。野間さん初め多くの御英霊達が同じ思いを抱き、命を懸けて日本を守る為に戦った事を忘れないでいただきたいのです。そして日本がこの先もずっと素晴らしき国として存在し続けることを願ってやみません。野間さんはそう言い残されました。私はそれを命ある限り語り継いでいきたいと思っております。野間さんが残した日本人としての心、誇り。そして国体を守る大切さをすべての日本人に…。

ご清聴ありがとうございます。

(三重県 多度大社 権禰宜)

信仰の力たち

山 本 晃 大

皆さんにとって神社とは、どのような場所でしょうか。おそらく多くの方が時節柄の参拝もしくはご祈祷に來られる所。また、ご本殿やお庭など、観光目的として來られる事が多いのではないのでしょうか。そんな神社ですが、昔と現在では様々な事が変わっています。例えば江戸時代頃には伊勢参りが通念となり、一生に一度は伊勢神宮へお参りに行くことがある種のブームになりました。また、少し前では御朱印がブームとなり、今なお参拝される方のほとんどの方が御朱印をお求めになるようになりました。当たり前の事ではありますが、その時々の方々の情勢によって変化をよぎなくされたり、物の価値などが変わったります。それは、今後の神社でもおこりますし、対応していかなければならない問題でもあります。

今現在、新型コロナウイルス感染症が落ち着いて來ました。多くの爪痕を残してはおり

ますが、参拝に来られる方や観光に来られる外国の方など徐々に回復しているのではないかと思います。その一方で、コロナ禍に物議をかもしたりモート参拝やオンライン祈祷という今までにない概念も生まれました。開始された当時は、ご利益は無いのではないかと神様に対して失礼ではないか等の意見が出ていたように思います。本来、参拝や祈祷をされるというのは直接神社に赴き、行うものです。しかし、コロナ禍ゆえにその直接顔を付き合わせることや、接触したものを除菌するなど、数多くの弊害から生まれました。私自身はリモート・オンラインという直接ではない行為ではありますが、申込するという思い自体に対してあっても良いのではないかと思いますし、足が悪い方、遠方にお住まいの方などコロナ禍関係なく、したくても出来ない方に向けて行ってもよいのではないかと思います。

このような災害から影響を受けるだけでなく、社会的な情勢からの影響もあります。例えば、最近では世界全体がキャッシュレスの流れになってきています。多くの方がクレジットカードやペイペイなど使われているのではないのでしょうか。私自身も勤めている神社の授与所にてカード使えますか等、聞かれる事が多くなってきたように思います。実際はまだまだ現金対応の神社がほとんどだとは思いますが、レジの機械を導入されているお社も

で来ています。さらにはカードでのお賽銭決算する所もあるそうです。導入された理由の代いたいはコロナ禍に対して、初詣の対策としてのキャッシュレス化になります。また、外国の観光客に対して、現金の不要化などインバウンドの観点からも導入されています。ただし、決済システムには手数料が発生するなど多くの問題もあり、直ぐに浸透・普及されるかどうかはわかりません。賽銭は別の物を奉納していたものが現金に変わり、電子マネーへと変わったというかたちになります。参拝されるかたにとっては小銭等を入れる行為がなくなり、少し味気ないものになってしまうのでしょうか。

携帯電話というのはほぼ全ての人が持っていると言っても過言ではないでしょう。先ほどのキャッシュレスもそうですが、携帯には様々な機能が備わっています。アプリを使って様々な事に活用するために肌身離さず持ち歩いているその携帯の中に、デジタルお守りが入っているというのはどうでしょうか。NFTという複製や改竄を防ぐデジタルデータ技術を用いることで、開始されました。実際のお守りと同じように祈祷を行い頒布され、一年経つとお焚きあげとして自動的に消滅するというシステムになります。お守りは木や紙・布・金属等、様々な材質や形の物にご祈願したものになります。ではこのデジタルお守りは電子にご祈願したものとなるのでしょうか。携帯はともかくとして、実物の物がな

いお守りは当然としてかさばることはなく、遠方の方でも即座に授与することが出来ます。ただし、気がつかない内にお守りのデータが消えてしまっている事や、誤って消してしまふこともありえます。

わかりやすく話題になったものをあげましたが、神社だからと何もしていない等ということではなく、それぞれのお社で様々な試みが行われていると思います。時代に即した在り方は常に模索されていくものではありますが、今は大きな過渡期になってきているように思います。

皆さんそれぞれに信仰される神社ないしはお寺、また別の宗教があると思います。今も昔も最も重要なことはお祈りするその心にあります。時代によってその信仰するカタチは少しずつ、時には大きく変わって行きます。

神社に携わる人間として今後も、このような変化を受け止めていけるよう精進していきたく思います。

ゼロの迎撃を読んで

鈴木明子

私は最近「ゼロの迎撃」という安生正さんの作品を読み、日本人の持つ崇高な精神性の美しさに感動しました。そして考えました。日本人の持つ美しさについて―美しい言霊、美しい礼節、美しい感性、天皇陛下を頂く美しい国体、国柄―それらについてお話したいと思います。

まず美しい言霊、魂が震えるような言霊ですが、

「すでに諸君も知るように、今この時、我が国は悪しき勢力の卑劣な攻撃にさらされている。もしここで彼らの侵略に屈するような事があれば、この美しい国が、互いをいたわり合い、助け合う事の尊さを知る人々が、深い闇に包まれるであろう。それを阻止すべく、ここに私は自衛隊全部隊に防衛出動を命じる。」

(明朝までに東京を壊滅する) 突如謎のテロ組織より犯行声明が届けられます。彼ら特

殊部隊は、梅雨前線と昭和三十四年の伊勢湾台風に匹敵する大型台風の上陸を狙って、大暴風雨の中、東京湾に入り込みます。そして次々に発電所や銀行、空港などを爆破占拠していきます。一方日本政府は憲法九条に阻まれて手が出ません。警察を投入するのですが、全滅します。とうとう自衛隊を出動させるより方法が無いと首相の訴えが始まった訳です。

首相の訴えは続きます。

「諸君にも愛する人がいるであろう。諸君の帰りを、無事を祈る人がいるであろう。しかし、この国難に際し、身を寄せ合い恐怖に震えながら救いを求める人々を、絶望の淵から救い出す事ができるのは諸君だけである。これから開始される作戦で、たとえ身が銃弾に倒れることになろうと、信頼する仲間を失うことになろうと、恐れることなくひるむことなく、決して退くことなく、敵を殲滅してほしい。」

と訴える訳です。訴えは続きます。

「この国に攻め入ることが、どれだけの代償を伴うのか、この国には真の平和を愛するが故に理不尽な侵略に対して、気高き盾となる鉄の集団が存在することを、思い知らせてほしい。」

と結ぶのです。この訴えで自衛隊を辞めようとしていた隊員も全員踏みとどまって、鉄の

集団となってくれるのです。

今我が国を守る為に戦いますが、意識調査は（五十歳以上の男性）十三パーセントです。美しい日本を守るためには、悲しい数字です。

次に日本人の持つ礼節の美しさについてですが、木村拓哉主演テレビドラマ（風間公親、教場ゼロ）。これは冷酷無比、冷たい眼差しのキムタク演じる刑事が、新人刑事の心を解放し、能力を引き出していく刑事ドラマで、長岡弘樹の小説をドラマ化したものだそうです。彼が退職して教官室を去る時、ピシッと背筋を伸ばし指の先までキリリと神経を張りつめ、ピキッと音がするほど美しい角度で美しい礼をします。

その姿勢からは、深い感謝と敬意の念が立ち上ってくるようで、実に美しかったです。この世の存在の全てに命を感じる神道の姿を感じ感動しました。

次に日本人の感性の美しさですが、今NHKの朝ドラで放映中の「らんまん」、世界的に有名な牧野富太郎博士の自伝的ドラマですが、植物を友人のように、恋人のように慈しんで採集しています。

「おまん、こんな所に咲いちよったか。えらいのう。」と植物に神の命の気を感じとっています。明治、大正、昭和の初め頃まで日本人は目に見えない命の気を感じ取る感性を、

誰もが持っていたのですね。

殺伐とした事件の多い昨今、神道の優しさ、美しさ、日本人の本来持っている繊細な優しい感性など再認識して人々に、伝えて行かねばと思うのです。

最後に皇室を敬う日本人の美しさについてです。

やすらげき世を祈りしもいまだならず

悔しくもあるかきざし見ゆれど

昭和六十三年八月十五日、全国戦没者追悼式での昭和天皇の御製です。

上皇后様が皇后様であらせられたとき

海陸のいずへを知らず姿なき

あまたの御霊国護るらん

とお詠みになっておられます。

いつも世界の平和を祈っておられる天皇陛下、あまたの御霊に心をかけられる皇后様、このように素晴らしい皇室を頂いている我が国体、国柄の美しさ、素晴らしさに誇りを持つと同時に氏子の皆様にもお伝えし、この国とこの国の神道を守っていかなければと思うのです。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

お山は見えてござる

高井春明

大神神社のご神体は「三輪山」でございます。昔から「お山は見えてござる」と日常生活の中に信仰が根付いており、私自身も幼き日より、祖母に手を引かれ、お参りの際は「神様から与えられた命に感謝し、楽しく生きなさい」と教わりました。

さて、楽しく生きると云えば、二〇〇八年八月八日、ご祈祷後に「本日は八八八と8が三つ重なり、末広がりで、素晴らしい日にお参り頂きました。きっと皆様に良いことが訪れます」と挨拶をしておりました。

私自身も良い事があるだろうと感じていた次の日、お社周辺の草抜きをしていた所、頭と腕二カ所を三匹のスズメバチに刺されました。

すぐさま、近くの病院のベッドで点滴を受けていると、偶然居合わせた近所の年配の方々に囲まれ「大丈夫か?」と心配の声が一斉に上がりましたので、「昨日は八八八と8が三

つ重なる日で、今日は、三匹の蜂に刺され正に蜂に苦しむ八月九日を迎えました」と答え、笑いに包まれました。その中の一人が過剰なまでに笑い、その勢いで入れ歯が外れ、寝ている私の方に落ちてきそうになり思わず悲鳴を上げてしまいました。無事に両手で受け止められましたが、蜂に刺された時よりも恐怖を感じました。

その後、蜂だけにバチが当たったのか、しばらく悩んでいた際、横浜の親しい社長様のご参拝にお見えになりました。早速、お話をした所、笑いながら「神様はバチを当てないよ。君に我が社のスローガンを教えてあげよう。関東ではよく知られている言葉だけど、『がんばれ』だ。但し、一般的な頑固に張り詰める『頑張れ』ではなく、顔面の「顔」と晴天の「晴れ」という字で『顔晴れ』だ。人生は必ず突拍子もない事が起きる。そんな時、悲観的になって立ち止まるのか、それとも、楽しく前向きに捉えるのか、その気持ちによって人生は大きく変わる。だから、君も顔晴れ」と励ましのお言葉を頂きました。

良い言葉を授かったなと早速、祖母に報告すると、「蜂に刺されて良かったね。蜂に感謝やねえ。それよりも、先程から一つ気になる事がある。蜂は前から刺して来たのか、後ろから刺してきたのか？どっちや？」と聞いてきたので「後ろから刺された」と答える。祖母は怒り「卑劣な蜂め！許せん！蜂といえども、正々堂々正面から刺して来たらしいの

に！よし！おばあちゃんに任せとき！」と言って電話を切られ、数日後に大量の蜂蜜が送られてきました。早速、電話をすると「蜂蜜を食べて仕返しや！」と言われたので、さすが「いやいや、蜜蜂ではなく、スズメバチなんやけど」と答えた所「同じ蜂や！気にしたらあかん！いいか、負けたらあかんよ！」と励まされ、蜂に刺されて悩んでいた自分が馬鹿らしくなりました。

そんな元気な祖母も九十二歳で体調を崩し、今夜が峠だと云う知らせを聞き、慌てて駆けつけました。そして、祖母の手を握り「これから楽しく生きるよ」と語りかけると、大きく呼吸をして満面の笑顔で息を取りました。

後に聞いた話ですが、晩年まで呉服店商をしていた祖母が、ベッドで苦し紛れに「もう一儲けしてやる」とつぶやいており、それが生前最後の言葉だったそうです。

「楽しく生きなさい」と常に言っていた祖母が最後まで身を以て実践した姿を見て、「私自身も祖母と同様な最後を迎えたい」そんな事を思いつつ、帰りの車内からふと三輪山を仰ぐと、祖母の笑顔が重なりました。「お山は見てござる」その言葉と共に抑えていた涙が溢れました。

「敬神崇祖」という言葉がございます。

祖先を尊ぶ事は神を敬う事です。人は神様から命を授かり、そして、自身が神となり、子孫を見守る。

三輪山は古来より祈りによつて伝えられ、たくさんの方が宿ったお山でございます。皆様方も家族や大切な人との時間を大事にして頂き、心のふるさとであります三輪の大神様とのご縁を更に深めて頂き、益々のご健勝ご多幸を心よりお祈り申し上げます。

(奈良県 大神神社 権禰宜)

料理と神様

岡田 順

私にとって、神様への御供物は『料理』です。料理を作るのと同じ気持ちで、御神前にお供えするのです。野菜や果物は土を落とし、綺麗に洗った物を使います。袋に入った小魚や昆布も、そこから出して小皿にのせて置きます。整ったお供物を前にすると、気持ちやすっと神様に近づくことができるのです。

でも、最近まで私はその気持ちをすっかり忘れていました。これからそのことをお話したいと思います。

私は料理人です。神主になるよりずっと前から料理を生業として歩んできました。『包丁一本あればなんとかなる』という気持ちは今でも変わりません。しかし、コロナの災禍は全てを変えてしまいました。

独立開業して六年目の三月頃です。新型コロナという疫病は猛威を振るい始めました。

お店の経営も落ち着き、開店資金として銀行より借りたお金を返す目処がやっとたった、さあこれからという矢先のことでした。

春先、まだどこか遠くのことだったコロナの波が、「近くのコンビニ店員の発症」というニュースとともに大きく降りかかってきたのです。ちょうど歓送迎会の時期ということもあり団体様のご予約もたくさんいただいている頃だったのですが、このニュースとともに予約はひとつ、またひとつと、みるみる消えてしまいました。予約帳に並ぶ赤い横線とその先の真っ白なページ。「コロナめええー」と私は本当に憎みました。

冷蔵庫には魚や野菜などたくさんのお食材が入っています。返済金の支払いはどうしよう。すべての目処が立ちません。

あれほど忙しかった私の世界が静止してしばらく、世に求められるまま営業自粛を決めると、私はこれまでできずにいた店の修理と改装を自分で行うところから始めていきました。壊れた屋根の修繕、物の整理、庭木の剪定など。仕事に忙しく行き届いていなかったことをひとつひとつ片付けていくうちに季節は初夏へと変わりました。コロナは依然と治まる様子はありません。

次に私は奉務神社に向かいました。先代より引き継いだお宮ですが、これまで毎月の月

次祭と例祭日以外はほとんどあがることはありませんでした。一步お宮に入るとメジロやウグイスが鳴き世の中のパンデミックが嘘のように、穏やかな空気に包まれました。

いつかやろうと思いきなかつたこと。開かずの間の整理、本殿や拝殿の隙間の修理等、作業はどんどん進みました。

ふと気づくと、まわりは赤や黄色や紫色のツツジの花に囲まれていました。ただただ美しく、山が生き物に見える様でした。こんなに美しい場所だったのかと、心に響きました。すっかりお宮で過ごす時間に慣れた頃、また月次祭の日がやってきました。掃除を終え、御供物の準備をしている時、私はある思い出の中におりました。私が神職を志す頃読んでいた本の中に、お伊勢さんの神様へのお供物の写真がありました。そのお供物の美しかったこと。『お供物は料理だなあ。私もこれを作ってみたい。』すうーと吹き抜けていく風とともにその時の感動が思い出されました。

そして、これまでよりも丁寧に準備をしゆつくり時間をかけて月次祭を行いました。とても落ち着いた気持ちになりました。次に私は思いました。『ああ、誰か参つて来てくれないかなあ』と。私は神社の掲示板に始めて文章を掲載しました。

一日の月次祭は十五時より行います。どなた様でもご自由に参加いただけます。

一日、午前中に清掃をし、午後の用事を済ませた後に祭典の準備をしていたら、一人の女性が現れました。「参加してもよろしいですか。」と聞かれ私は、「どうぞどうぞ。」と拝殿に招きました。女性はこの張り紙を見て、十五時からならば参加できるかとも思い、参られたそうです。私は嬉しくてたまりませんでした。

自分のしてきた事を神様は見えてくださり、守っていただいている。

『いつもありがとうございます』その想いを込めて、お供物をし神前に向かいました。

そうして、日々感謝とともに丁寧に歩む日々が、また新たな縁を結んでゆくのです。

あれほど憎いと思ったコロナは大切な事を教えてくれたのです。

(広島県 倉神社 宮司)

沖繩を想う（七月月次祭での講話）

小野 日隆

おはようございます。今月もようこそ月次祭にお参り下さいました。今日から七月、後半の始まりです。昨日の夏越祭で、後半に向けての新しい力を頂かれたことかと思えます。今日も暑くなりそうですが、どうぞ、熱中症にはくれぐれもお気をつけ頂きますように。

さて、今朝は「沖繩」の話をしたいと思います。先月の二十三日は「沖繩慰霊の日」として、平和公園での慰霊祭や平和の礎に手を合わせる方々の様子が報道されていきましたのでご覧になった方も多いと思います。最近では旅行番組やグルメ番組で紹介されることが多いので、皆様も沖繩をより身近に感じているのではないのでしょうか。

私は、毎年、二月末から三月にかけて一週間ほど沖繩本島南部の糸満市に、「遺骨収容」のボランティアに行っています。今年も、修養団のボランティアグループが主催する「沖

縄戦遺骨収容ボランティア」に参加してきました。今、私は「遺骨収容」と言いましたが、皆さんの耳になじんでいるのは「遺骨収集」という言い方だと思います。「収集」と「収容」がどう違うかという事になりますが、我々の活動は、いまだ沖縄の山野・洞窟に取り残され眠る、わが国の礎となられた方々をお迎えする活動を行っています。そして、戦陣に倒れ、戦火に巻き込まれ亡くなられた方々の慰霊祭を斎行し、ご遺骨を、南の明るい陽光が降り注ぎ、太平洋を間近に望む平和祈念公園にある国立墓苑に納めて頂いております。公的用語としては「遺骨収集」であるため、「遺骨収容」に違和感を持たれる方もおられます。うが、我々は敬意と感謝の心を込めて「お迎え、慰霊する行動」として、「収集」ではなく、「収容」と申しております。

さて、その遺骨収容活動ですが、今年も二月二十三日から二月二十八日迄行ってきました。参加者は私を含めて茨城、埼玉、岐阜、兵庫、岡山、広島、香川、福岡、佐賀など全国各地から、そして地元沖縄から参加した、十八歳から八十六歳迄の二十一名。それぞれに誠心誠意のご奉仕をさせて頂きました。

今年は、第二十四師団司令部が置かれた糸満市の宇江城という地区にあるクラガーと呼ばれる大きな司令部豪の近くで、宇江城集落南側にある、沖縄でガマと呼ばれる洞窟での

作業でした。洞窟はサトウキビ畑の端から五メートル程の急斜面を登ったところにある丘陵斜面にありました。陣地と言うよりは、南方洋上からの艦砲射撃や、航空攻撃からの避難壕であつたと推測される、天然の洞窟でした。戦後七十八年経った入口は、まるでそれを隠すかのようにガジュマルの太木と、枝から延びる気根で覆われていました。

既に一通りの収容作業がなされた後ですが、今回の我々の作業は、前回の作業で見落とされた、取り残された部分の搜索です。前回の作業で動かしただけの岩や土砂を再び動かして搜索するという地道な作業を繰り返しました。大きな石を数人で動かし、土を掘り、ふるいにかけてご遺骨を探します。主要なご遺骨は収容された後であり、お迎えしたのは多数の部分ご遺骨や歯でしたが、手榴弾、小銃弾、銃剣、ボタン、硬貨なども見つかりました。戦後八十年近くが経っていますから湿度の高いガマの中ではご遺骨も土にかえってしまっているような状態で、見つかるのは、殆どが小さな骨片のみでしたが、歯だけはしっかりと残っているのが印象的で、中には金や銀がかぶせられたものもありました。

最終日、収容したご遺骨は、南北の塔前で私が齋主を務め、参加者の若手神職と二人で慰霊祭を斎行します。毎年慰霊祭を奉仕する、南北の塔は、今回の作業現場の近くで、激しい戦闘が繰り広げられた真栄平という集落にあるアバタガマと呼ばれる当時住民が避難

した洞窟の上に建てられています。真栄平地区は八百五十人の住人の内、五百人近くが亡くなったという悲惨な歴史があります。慰霊祭の後、ご遺骨は摩文仁の平和祈念公園にある戦没者遺骨収集情報センターにお届けし、仏式供養と全員での献花をします。最終的に焼骨の後、太平洋を望み、明るい陽射しが降り注ぐ国立墓苑に納骨される予定です。

先の大戦末期、沖縄は南の楽園から一転、鉄の暴風と例えられた米軍の激しい攻撃にさらされ、沖縄県民の五人に一人が亡くなるという大東亜戦史に刻まれる悲惨な戦地と化してしまいました。沖縄戦では日米双方の軍人軍属に沖縄一般県民九万四千人を加えて二十万人が亡くなりました。

私は「沖縄」を想う時、いつも大東亜戦時、海軍沖縄方面根拠地隊司令官、大田実中将が海軍次官宛に発信した「決別電報」が浮かんできます。電報の最後が「沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノゴ高配ヲ賜ランコトヲ」と結ばれた有名な電報です。沖縄の人々が生命財産の全てを投げうって、いかに戦闘に協力したか、沖縄県民の献身的な姿勢のみを記したその電報の末尾は「一木一草焦ト化セン 糧食六月一杯ヲ支ウルノミナリ 沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノゴ高配ヲ賜ランコトヲ」とあります。「沖縄県民はこのように戦ったのだから、後世、決して沖縄をおろそかにせず、平和になった時

には、沖縄県民に格別の配慮をしてほしい」

今、私たちは、御英霊の尊い犠牲の上に築かれた豊かで平和な時代に生かされています。今の時代が豊かであればある程に、平和であればある程に、遠く沖縄に思いを馳せ、七十八年前、「沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノゴ高配ヲ賜ランコトヲ」と地下壕から我々日本人に訴えた大田司令官の遺言ともいうべき「願い」について、今一度考えなければと強く思います。

はたして、日本政府は大田司令官の「願い」に込めているのでしょうか。今の沖縄はどうでしょう。残念ながら本土決戦を控えて、塗炭の苦しみを強いられた挙句、二十七年間アメリカの軍政下に置かれ、今なお在日米軍基地の七十五パーセントが集中しています。最近是中国からの侵略の脅威にもさらされています。

あの悲惨な戦争から七十八年が経った今、「後世」の日本政府は、我々国民は、どれ程の沖縄の悲惨な過去に対する「思い」を持ち、沖縄に「心」を致し、「格別の御高配」を実行しているのでしょうか。

恐れ多い話ですが、天皇皇后両陛下には沖縄に対して特別の思いを致され、沖縄慰霊の日である六月二十三日には、戦没者に対して黙祷を捧げられるとのことです。

「思はざる 病となりぬ 沖繩を たづねて 果たさむ つとめありしを」、昭和六十三年の年頭に発表された御製ですが、ご不例により、念願の沖繩ご訪問が叶わなかった昭和天皇のご無念の程が拝されます。沖繩への思いは上皇陛下へと受け継がれ、六月二十三日の「沖繩慰霊の日」は、「広島」と「長崎」の原爆忌、「終戦記念日」とともに、「忘れてはならない日」として、毎年静かに黙とうを捧げられ、平和を祈られてきました。さらに上皇様の沖繩への思いは今上陛下へと受け継がれます。先日、六月二十三日の沖繩慰霊の日には、インドネシア行幸啓を前に滞在先のホテルから黙とうなされたそうです。

昭和天皇から上皇陛下へ、そして今上陛下へと三代にわたる天皇陛下の、沖繩に御寄せになられる大御心は、沖繩戦没戦没者の慰霊と、沖繩が、本当の恒久平和を手にする日への願いが込められた祈りなのです。

来月、八月十五日は終戦記念日です。日本武道館での政府主催の戦没者追悼式がテレビ中継されますが、今年の八月十五日は大田司令官の決別電報を思い出していただき、沖繩の悲惨な歴史を思い出していただきたいと思えます。

以上、月次祭終了のご挨拶とさせていただきます。ようこそお参り下さいました。

祓い

染谷 淑子

今年も暑く、雨の激しい夏がやってまいりました。雨の被害が九州北部に集中しており中国・九州の参加の方が多いので心配していました。お見舞い申し上げます。

さて、この梅雨から夏の盛りを迎える時期に、全国の神社では「水無月のお祓い」が新暦や旧暦でとり行われています。「水無月のお祓い」は「夏越のお祓い」とも言われて大祓詞の奏上と「水無月の夏越の祓いする人は、千歳の命のぶというなり」と唱えながら、境内の茅の輪をくぐったり、人形に息をふきかけたり、体を撫でるなどしてそれを川に流しました。今は禁止でしょうか。

ここにお示します「うちわ」は千葉県の伝統工芸品です。お配りいたしますので手にとつて是非ご覧下さい。千葉県は海に近い安房^{あわ}と中央部の上総^{かずさ}と北部の下総^{しもづな}に分かれます。安房の国は別称として房州^{ぼうしゅう}と言います。千葉の安房の神職さんはお餅の中にあんこが入っ

ているのが普通で、日本全国のお餅にはあんこが入っていると思っていて、関東の四角いお餅の中にどうやってあんこを入れるのか謎だったと言っていました。四国も丸餅であんこを入れるので、かって海路で人々や文化が各地に伝えられている良い例だと思います。皆様のところのお餅はどんな食べ方をしますか。是非、おいしい食べ方を教えてください。以前は「腸わた餅」といって夏の食養生として夏の暑い盛りにお餅をつく地方もあったようです。食べ物の話は止まらなくなるので「房州うちわ」に話をもどします。

この「房州うちわ」は千葉県の女子神職会の事業として初めて企画したものです。昨年末に予測発注して三月に納品していただきました。無茶を言ったと反省して、来年分は七月末締切でお願いする予定です。竹も切り時があるようですし、竹の作業工程が伝統工芸品にありがちな手作業と、熟練の度合いで完成度が違う事で、来年分は早めをお願いする事になりました。工房さんも少しは安心してくださるでしょう。

千葉県民である私達もこれを好機に千葉県を知ろうと安房で女子神職会主催の「房州うちわを造る体験・研修会をしました。一本の細い竹から均等な骨組を作るなんて視ているだけで「もういいです」でした。その上にノリでへろへろな紙を貼って強くこすると注意（おこられ）されて、縁にそって細い長い紙をきれいに貼って、糸の房をつけて、見事に涛を

うった「マイウチワ」が完成です。それでも人間は自分で作ると、世界で一番良いうちわに思えるものです。

そんなこんなで諸々な願いをこめて完成した「房州うちわ」ですが、「お祓いうちわ」の文字で悩みました。字がきれいとか配置とかでは無く、「お祓い」の文字が入る以上は、氏子様たちから、やはり神棚に上げるべきか、どこに置いたら良いのか。夏だから暑いときにおおいで良いのか。もっと様々なその氏子様の神様との関係性からのご質問があると予測されました。さて困りました。結論から申し上げますと、とりこし苦労でした。当社でも六月三十日の「浅間様」の初宮さんの若いお母様が「大事なもので高い所が良いですね」といつていただいたのには驚かされました。うれしい驚きでした。社頭の頒布について、私も他の神職さんも知らなかったのですが、NHK放送局が「房州うちわ」の特集をやって下さったそうで、皆様良く知っていて、この価格で頒布してくださいと言っていたので一安心しました。

このような機会を与えられて二つ勉強しました。同じ県内でも知らない事があります。皆様はいかがでしょうか。「伝統工芸品」は日本で作り、日本の資材を使う。手作業が多い。暑さ寒さを我慢する。そして価格が高い。百均で売っていない。実生活で必要な

い。いろいろ理由がある事でしょう。今後は竹の確保も、適した紙の製造も、職人さんの高齢化も問題点はたくさんあります。微々たる私共千葉県女子神職会の事業ですが、この「お祓いうちわ」を夏の神社の新しい授与品として大切にしていたいただきたいものです。

もう一つは「祓い」についてでした。丁度國學院大學の企画展で「祓え」儀礼と思想――を國學院博物館で五月九日～七月九日までやっていたので行ってきました。今の「大祓い」になるまでの歴史を学んだことで日本と日本人の偉大さを実感させられました。常により良く、より幸せになる様に、常に方法を研究し提案し、またより良い研究方法を確立していく。それは人間が皆幸せであれと願う皆様の神社の大神様のお心にもかなう事ではないでしょうか。

伝統工芸品の物作りと神社の年末の注連縄作りを比べるのはどうかと思われるでしょうが、やはり大変になってきています。子供達に手で作る体験で小学校で稲わらで注連縄作りをしました。が、スイッチで出来ない事はやりたくないようです。今回の事業の中で、現状が少しは分かり、今後も大神様と氏子さまのお役に立ちたいと思うしだいです。

祇園祭終了後挨拶

初村礼子

本日は祇園祭のご案内を申し上げましたところ多数の皆様にご参列をいただき有難うございました。三年間猛威を振るった新型コロナウイルスもようやく沈静化の兆しを見せ五月には季節性インフルエンザ等と同等の五類に分類されました。私たちの生活も元の日常を取り戻しつつあります。この三年間、一日も早くコロナが終息してくれることを願って、大神様には疫病退散のお祭りを日々重ねてまいりました。先ずもって、氏神様・速来宮の大神様のご神恩に深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

ただ今御神前にて祇園祭を斎行し、この夏の無病息災をご祈念申し上げます。当宮の祇園祭の歴史を紐解きますと今から約百八十年前、江戸時代末期の天保九年の夏、早岐一帯に赤痢が流行しました。激しい腹痛と血便を伴う赤痢は衛生水準の低かった当時、大規模な集団発生を引き起し、特に子供には劇症化しやすい恐ろしい病気でした。この疫病が

早岐の町を襲ったのです。地域の人々の恐怖は現代において「新型コロナウイルス」の感染拡大を経験した私達にも容易に想像できるのではないでしょうか。薬も十分でない中、人々は速来宮の主祭神であり悪疫退散の神様としても有名な素戔鳴尊のお力をいただいて疫病を治め、元の平穏な生活を取り戻したいと願って、お神輿に神様をお遷しして町内を巡ったのが祇園祭の始まりと伝えられています。

令和二年一月、新型コロナウイルスの感染が始まり瞬く間に世界中に拡大していく中、第一波・第二波と回を追うごとに感染者数は増加の一途をたどり、三密を回避するために人がなるだけ集まらないようにと色々な行事が中止・縮小されてまいりました。その影響は神社の祭典にも及びました。しかしながら当宮の祇園祭は、私たちの先人が疫病から地域を守るために氏神様に助けていただいた歴史に鑑みて、今こそ新型コロナウイルスの終息を願って神様のお力をいただきという皆様方の気持ちを受けて、規模は縮小しましたがお神輿の巡幸を続けることができました。これから、人間の生活を脅かすウイルス・疫病がこの世の中からなくなることはありません。私たちは過去の歴史に学び、経験を今に生かしつつ大神様への祈りを重ねて、互いに支え合って平穏な生活と健全な地域社会を営んでまいりたいと思います。

ただコロナを経験して改めて見直されたこともございました。その一つが参拝者数の増加です。もちろん神社での個人の御祈願は若干少なくなりましたが、参列をされるご家族の人数もぐっと減りました。しかし神社に自由に参拝をされる方が増えたのです。ご家族で或いはお友達とまたは一人でと参拝の形は様々ですが一日を通してお参りがございました。コロナに感染するのを恐れて人込みを避け家にこもって鬱々とする中、神社の存在を思い出したという方もおられました。ご家族のことを思っただけか一心にお参りをしておられる方もございました。どのような形であれ地域の氏神様に守られていることに思い至っていただけたのは有難いことだと思っています。私達神主は、祭典を通して神様に祈りを重ね日々地域の安寧と、氏子崇敬者の皆様の平安をお祈り申し上げています。神様は常に、皆様をお守りくださっています。御神恩への感謝の気持ちを込めて、これからも祭りを継承してまいりたいと思います。

今日は、社務所にて四年ぶりに直会を致します。コロナウイルス感染症拡大の中、直会食事はさすがに出来ずにいました。しかし、直会は祭典の重要な儀式の一つでございます。神道では神様にお供えをし、そのお供えのお下がりをお食すときに、神様の御力と恵みをいただくといわれています。皆様方もご存知のように直会では献杯の発声で神様にお供

えしたお神酒をいただきます。地方によつては御神酒だけでなくお餅や神様からのお下がりの神饌を調理していただくところもございます。畏くも、天皇陛下は秋の「新嘗祭」においてその年の新穀、新しいお米によつて調理された様々なお供え物をお手づから、お取り分けになり、皇祖天照大御神と天神地祇八百万の神々にお供えになり、国家・国民の安寧と五穀の豊穰に感謝し、祈念なさいます。そして、天皇陛下は、この神前にお供えしたものと同じものを御自らも召しあがられ、神様の恵みをいただかれます。直会で盃を酌み交わし神様の恵みのもと更なる活力を養いたいと思います。

最後になりましたが、明治天皇御製を奉唱いたしましたして、皆様方のご健勝をお祈り申し上げたいと思います。

ちはやふる神のまもりによりてこそ

わが葦原のくにはやすけれ

ご参列有難うございました。

(長崎県 速來宮 宮司)

敬神生活のすすめ

塩 崎 昇

敬神生活の綱領

一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し 明き清き誠をもつて祭祀にいそしむこと

今日は、私たちが普段唱えておりますこの一説を更に深掘りをして解説してまいります。

さて、皆さん 神さまの恵みとは何でしょうか？

神さまが授けてくれる幸運とか、願いが叶うとか、願をかけて神社をお参りされる方が多くいらつしやると思います。もちろん、そうしたこと神の恵みであります、私たちの遠い遠い祖先たちは、それよりももっと素朴な感情を大切にしていました。

それは、自然のありとあらゆる物に神さまが宿っている。草や木、水や火や土にも神さまが宿っていると。つまり自然のあらゆる物には命があつて、何らかの意思がある。命が宿っているならその命は一体どこから来たのでしょうか。『古事記』では、命はムスヒの

神々から生まれたと伝えております。海外の唯一絶対の神がこの世界を創り給うたではなく、神々から生まれてきたと伝えているのです。ムスヒには漢字の「産」という字があらわれています。お産の「産」。つまり生むということです。人も神さまも、そしてこの国土、小さな島々に至るまで、すべて神さまから生まれた。同じはらから、つまりみな同胞。兄弟であると伝えていくわけです。

神の恵みとは、生きていくもの全てに宿る生命（いのち）の力と 命を育むために関わる命とのムスビつき、つまり、「縁」、ご縁のことなのです。

理解を深めるために草や木に例えてみましょう。

草木なら、種から発芽します。土の中から「ポツ」と芽が出ます。やがて茎が伸びて葉を茂らせます。そして、花を咲かせたり、実を成らします。実を成らしたら、種を落とし、やがて朽ちて衰え死んでゆきます。しかし落とした種から再び新たな生命が生まれてきます。

この、自ら生まれ、姿を変えながら成長してゆく生命の力。これは一体何なのでしょう。暖かくなり、水が行き渡り条件が整ったら発芽することは昔の人もわかっています。し

かし、全ての種が発芽するわけではありません。種に小さな炎が灯るように生命が生まれる。その力はなぜ生ずるのかを科学で説明することは出来ません。太古の昔を生きた日本人は、この姿を変えながら成長してゆく姿をみて、そこに神さまが宿っておられる。これこそが、神さまが与えてくれる恵み。神さまの力だと考えたわけです。

一方で、新しく生まれた命は、周りからの助けがないと成長してゆくことができません。草木に限らず人や動物でも、栄養を与えてくれるものがが必要です。草木なら、お日さまの力・水の力・土の力が大きく関わります。これを天地（あめつち）の力、漢字で「天」と「地」と書いて呼びました。決して種が持つ生命の力だけでは生き続けられない。他の周りの力と交じり合って成長して終わりに向かっていくのです。天地の力には、生命を育み包み込むような優しさがありますが、苦難を与える荒くきびしい力があります。厳しさに耐えられないと生命は失われます。こうした天地の助けがないと生命は育つことができません。

この自らの生命と、扶けになる他の生命を結びつける力は、「むすひ」が濁ってムスビ「結び」という言葉になりました。ムスビは横に張り巡らされた糸のように命と命を結びつけます。つまり「縁」のことなのです。

そして命は子孫に受け継がれます。今度は縦の糸のように繋がり、紡がれる一筋の道といえます。私たちには誰にでも二人の親がいます。その親にも二人ずつ親がいます。お爺ちゃんお婆ちゃんです。そのお爺ちゃん、お婆ちゃんにも二人ずつ親があり、又その人達にもそれぞれ二人の親がある。無数に広がる人の命、このひとつが欠けたなら、自分はこのに存在しない。生まれてくることはなかったわけです。私たちは先祖が紡いだ命の「中今」（なかいま）を生きているにすぎないのです。つまり、私たちは、祖先から受け継いだ命を継いでゆく途中を生きており、子供や次の世代に受け継いでゆく、命だけを継ぐのではありません。考え方や習慣、歴史や言葉、そして日本の文化、更には神道を子孫に伝えてゆき、子孫が繁栄することを慶びとしているわけです。

この命は、遠い遠い祖先からの繋がりであるので、生命を紡いでくれた親や祖先の恩に感謝することを忘れてはならない。こうしたことに気づきますと、「神の恵みと、祖先の恩」とは、それぞれ別々のものではあるけれど縦の糸、横の糸として一体であるということになります。

次に「明き清き誠」とはなにか。これは神職の皆さんならご承知の通り、神道の「清」「明」「正直」の徳目のことであります。特に「明」は明るい。明き心です。いつも楽しく

笑って過ごせると良いですね。笑いは明るい心の表れです。笑いは幸せを呼びます。「明き」の明るいのは、日が当たっているから明るいのであって、日の大神、「お伊勢さん」の力を浴びているということなのです。

最後に、「祭祀」。神さまやご先祖さまをまつことです。お家には「神棚を設け、お伊勢さんのお神札「神宮大麻」と神社のお神札をお祭りします。毎朝、夕と手を合わせて「祓え給え 清め給え 守り給え 幸え給え」と心の中で唱えて下さい

「祓え給え 清め給え 守り給え 幸え給え」

「祓え給え 清め給え 守り給え 幸え給え」

「祓え給え 清め給え 守り給え 幸え給え」

神棚に向かって拝むことは、遥か遠くにあるお伊勢さんと神社を家に居ながらにして拜んでいるのと同じです。こうすることで、神さまのお力を自分の中に取り込むことができます。そして「ご先祖さま」。お家にはお仏壇、またお墓がありますが、祖先を敬い祭ることは感謝の誠、御霊を慰める清らかで優しい心で望みます。「中今」を生きる私をどうかお側で見守っていて下さいとお祈りして下さい。そうしますと、ご先祖様は神さまと共にあなたの人生を導いてくれる。人生は楽な事ばかりではありません。苦しい時やしんど

いときの方が多いのです。良き道に導いて下さるのは神さまでありご先祖さまでありますから、その事を信じ「明き清き誠をもつて」まつることを怠らないようにいたしましょう。

明治天皇御製

わが国は 神のすゑなり 神まつる 昔の手ぶり 忘るなよゆめ

とこしえに 国まもります天地の 神のまつりを おろそかにすな

こうした暮らしぶりが 「敬神生活」。ぜひ意識して 毎日手を合わせお祈り下さい。

(和歌山県 伊勢部柿本神社 宮司)

不思議な龍神様

大島 靖彦

皆さんは龍を見たことがありませんか。多分、見られた方はいらつしやらないと思います。私は龍の存在については、心の中では八割は想像上の生き物で、二割はいるかもしれないと、ずっと思っていました。其の訳は人間が作ったにしては、出来映えが良すぎるので、とても人間が作るのは無理で、普段の生活の中でも、絵や彫刻でも見かけるので、実際にいるかもしれないと思っていたところです。ところが、昨年の令和四年六月二十日に筑後市において、龍が現れたのであります。私が直接見たのではなく、水利委員さんが溜池を掃除に行かれた際に、スマートフォンで池を撮られた時に、何と龍が写っていたのです。その時大変驚かれて、私がその地域の宮司をしていましたので、私の所に相談に聞きました。それを見て初めての経験でしたので、大変驚きにか動揺が走ったのを、感じました。

そこで、龍が現れたのは、何かのメッセーじだろうということで、お祓いをお願いされましたが、この種の祝詞は持ち合わせがなく、早速祝詞作成の必要性から、熊本県の龍神を祀る神社に行ったり、福岡の書店に行ったりしていましたら、何と龍神祝詞があることを発見しました。この時、龍神祝詞がある位なら、やはり龍は存在するのではないかと思いました。

無事祭典は済み、その時お尋ねすると、以前は水神さんが祀っており、水門改修の折無くなったとのことでした。

この写真のことをもう少し詳しくお話しますと、龍の顔は正しく皆様がご覧になっている龍そのもので、それから受ける印象は恐怖以外の何物でもありません。泡立った池の上でとぐろを巻いていて、顔は直視し正体しています。このことから直感したことは、龍神さんはこちらを認識していると思ったことです。こちらはただ池を掃除しようと池だけの写真を撮っただけなのに、龍が現れたから撮ったのではないのです。写した後に確認したらなんと龍が写っていたのです。正しく開けてビックリ玉手箱の世界です。写真は二枚有り、一枚は波だった池の水面にとぐろを巻いた龍が浮かんでいます。もう一枚は穏やかな水面にとぐろを巻いていて、ポーズはどちらも同じです。因みに龍の顔は白色で、とぐろ

の色は黒色です。

二種類の写真があることは実在する証拠かもしれません。再度驚きました。その坂田溜池の洪水吐の広さは、縦五メートル、横二十メートル位の狭い池です。この二枚の写真を写したのはどの位の時間差かと尋ねましたら、わずか数秒とのことでした。なぜ、その場所に現れたのか気になりましたので、いろいろ調べて見ますと、隣の八女市に龍ヶ原という地名があり、また龍が現れた近くの筑後市側には、辰池という地名を持った小字名が三筆あることが分かりました。その辰池からは龍が天に昇るのをみたという人がいるとの話もお聞きしました。こうなると、だんだん信憑性が増すばかりで、当初少し疑う気持ちから間違いないと変わってきました。目下龍について研究中であります。

ほとんどの本には、龍は人間によって想像された架空の生き物で、古くからその年を表す動物として親しまれた干支の中で、龍以外は全て実在の動物なのに、龍だけは異質な存在であると書かれてありますが、私はそれは適当でないと思います。

さて、我々人間は三次元の世界に住んでいますが、龍は四次元の世界に棲んでいるとも言われています。ある本によると、低次元から高次元へは行くことができないが、龍は高次元から低次元に行くことが可能であって、このことから私が感じたことは、龍がカメラ

を直視していることから、龍の方からはこちらが見えているが、こちらからは龍が見えないということとは、これに当てはまると思います。分かり易く表現するならば、マジックミラーの世界に例えられると思います。先ほど述べました高次元から低次元への考え方と合致すると思われます。神道の根本的な考え方は自然との共生で、水と関係する龍神は水神同様に自然と共生し、水の恵みを大事にすることから、龍神という神様として崇められるようになったものと思われます。龍神としての様々な後利益や信仰は紙面の関係上、割愛させて頂きます。

今は不思議な不思議な龍神様ということだけをお伝えさせて頂きました。

(福岡県 六所神社 宮司)

神宮大麻頒布始め祭でのあいさつ

村 田 直 敏

本日は〇〇支部神宮大麻頒布始め祭のご斎行、誠におめでとうございました。

貴支部に於かれましては日頃より神社庁の諸活動に対し、ご協力いただき、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、神社（神職・総代）が各家庭へ神宮大麻を頒布するようになって約百五十年の年が経過しております。

それでは、それ以前はどのようにして大麻をおわかちしていたのでしょうか？

実は、伊勢神宮の周りに宿坊を経営しておりました御師（おんし）が存在しておりました。

た。それぞれ、担当の地区を持ち、その地区から参宮される時はガイドとしてツアーコンダクターとして神宮を案内し、自分の宿に泊めておりました。また、年末になれば担当地区の各家庭に神宮大麻を頒布されておりました。

ところで、十二月のことを師走と言うことはご存知だと思います。

しかし、師走の師は学校の先生のことだと勘違いされている方が多数いらつしやいます。確かに先生は通知表作成など多忙な時を過ごされています。ただ、家の中での作業であつて、外を走っておられません。

師走の師とは御師の師のことです。御師は大麻頒布のため地域を走り回っていたのです。

残念ながら、現在は御師はいらつしやいません。〇〇支部の神職・総代の皆様。もう直ぐ十二月です。師走です。どうか、走り回って大麻頒布に努めて下さい。そして、多くの家庭に大麻をおわかし下さい。

最後に今日ご参集の皆様方のご健勝と各お社のご発展を祈念いたし、○○支部大麻頒布
始め祭に際しての神社庁からのお願い並びに挨拶に代えさせていただきます。

(佐賀県 香椎神社 宮司)

主座を保つ暮らしを心がけませふ

柴田 宜夫

一、はじめに

◇幸せは三つある

- 1 してもらう幸せ 〓 感謝の気持ち
- 2 できるしあわせ 〓 謙虚な心
- 3 してあげる幸せ 〓 希望

*自分にとって都合の良いもの 〓 「よい出来事」

*都合の悪いもの 〓 「悪い出来事」

↓ 自分の秤にかけて判断

◎ 「損か得か」という人間のものさし

「音に聞き 眼にみえるもの ことごとくに

産土神の 御身にこそあれ」

* 「産土百首」を著作、本田親徳という江戸時代の神道家

※今、目の前に起こるすべての出来事は、神様のお力によるものだと、恐れ敬い、謙虚に受け止めて、向き合うことが大切

◎人生で意味のない出来事は、一つとしてない

↓ いい出来事 〓 日々の暮らしのエネルギー

↓ 悪い出来事 〓 成長の糧となりえる

※「起きてくるものはすべてよし」

◎「嘘か誠か」「正義か邪悪か」という神様のものさしで、向き合う ↓ 神社

神道の信仰の柱である「前向きに人生を楽しむ」というところにつながる

◇新型コロナ感染症の拡大から三年半

*エンデミック ↓ 流行が、恒常的に社会に存在

*行動変容、祭典変容

*トレード オフ

*普通の病気になった

*トレード オンにしなければ

↓ 怖がりすぎず、怖がらなさすぎず

◎恐れと敬いの心のミックスした畏しこむという慎み深い心が大切

*なぜ、このコロナ禍、日本は社会的秩序が保てたのか

↓ 国体、国柄を見失わなかった

麗澤大学のジェイソン モーガン准教授

「心に書いたルールを消さなかった」

↓ これから述べたい日本人の伝統的精神、日本人らしさ、

大和心 Ⅱ 大いなるやわらぎ

↓ 日本人の心 誠の心

↓ ちなみに、吉田松陰先生は、誠には三つある

*実 一 久

二、パクス ヤポニカ（日本の平和な時代）

▼戦乱のない泰平の世

*平安時代と江戸時代の約五百年間

*なぜ、パクス ヤポニカを作れたのか

↓ 日本人らしい、「従順性」と「寛容性」

◎顕著な特徴 Ⅱ 天皇制と神仏習合

▼従順性

*どんな苦境にあっても、天皇陛下の「バランス オブ パワー」としての御存在を心の柱 Ⅱ 耐え忍び乗り越えてきた

*コロナ禍 Ⅱ 社会的秩序を保てた ↓ 「従順性」

▼寛容性

*異なる文化をも受け入れて、さらに、日本らしく進化させた

*明治維新から戦後の高度経済成長

↓ 海外からの技術を導入し模倣、技術の移転をおこない、技術を進歩させた

Ⅱ 「技術スピルオーバー」

◎「寛容性」

▼日本人らしさを駆使し、「パクス ヤポニカ」を目指す

三、日本人らしさとは「日本人のオプリージュ」

◇日本人の心とは

▼「敷島の 大和心を 人間はば 朝日ににほふ 山桜花」

*国学者本居宣長翁の和歌

↓ 日本人の心、大和心は、咲きにおう桜の花のように美しく、尊いものである
という意味

*花を見て美しいと思うのは当然

↓ その美しいと思う心 Ⅱ 素晴らしく美しい

▼「こころをを持って生まれてきた これほど尊いものがあるうか そして この心を悪く使う これほど相すまぬことがあるうか 一番大事なことは このこころに花を咲かせること」のです。

*仏教詩人の坂村真民さんの詩

▼「花を見ていみじと思う心あらばさて生きよ 昨日今日よし味気なくとも」

*近代日本の詩人佐藤春夫さんの詩

↓ 花を見て美しいと思う心があれば、たとえ、毎日がうまくいかずに、エラーばかりで、つまらなくても、また、トライしよう、生きて行こうよという、

苦しい時の応援歌

▼神社神道はつながりの宗教

*神社神道は、「つながりの宗教」

↓ 神様、大自然、人々につながり共に生きてきた

▼「昔も今も、また未来においても変わらないことがある。そこに空気と水、それに土などという自然があつて、人間は自然によつて生かされてきた。人間は、助け合つて生きているのである。」

↓ 作家の司馬遼太郎さんの言葉

*助け合い支え合う生き方

↓ あらゆるものとのつながりを大切にする

↓ 支えあい、尊び合いながら生活をする

◎「共尊共生共栄」

◇日本人のオブリージュとは

▼ノーブレス・オブリージュ

*高い地位に伴う道徳的、精神的義務を表す言葉

*日本

↓ 国民すべての人 Ⅱ 責任と義務を果たすことを 当たり前のこと

↓ 社会的秩序が保てた要因

▼ 日本人の美質

- 1 森羅万象に神仏を見出し感謝の心を忘れない
- 2 弱い立場の人、貧しい人に救いの手を差しのべる
- 3 どんな困難も正義・道徳・正直・倫理・モラルを駆使して乗り越えていくという気概を持っていた

◎ 日本人のオブリージュ

▼ 「日本は、貧しい、しかし高貴だ。 地上で決して滅んでほしくない民族をただ一つ挙げるとすれば、それは日本だ」

* 大正の末期から昭和の時代に、駐日大使を務めたフランスの詩人ポール・クロデルの言葉

* 関東大震災より今年で百年、その当時の駐日大使

↓ この地球上で一番危険な土地が日本

▼日本人が失おうとしている三つのこと

1 廉恥心

↓ お天道様が見ている、恥ずかしいことをしてはいけない、御先祖様に顔向けができない

2 道徳

↓ 人として守らなければならないルール

3 誇り

◎日本人としての理想的な生活の心がけ

三、おわりに

▼伝統的日本人の精神

*松下幸之助

1 衆知を集める

◎みんなで協力して知恵をだして問題解決する

2 和を貴ぶ

◎助け合い支え合って生活をし、運命共同体としての地域社会を構築してきた

3 主座を保つ

◎「主座」 Ⅱ 日本の国、天皇陛下、御皇室の存在、地域社会、氏神様、ご家庭
▼「ふりつもる 深雪^{みゆき}にたえて 色かえぬ

松ぞ雄々しき 人もかくあれ」

*雪の重さ、冷たさ、厳しさにも耐^たえて、色をかえない、松のような強さを持ちな
さいとの大御心

主座を保つ暮らしこそ敬神生活

(山口県 彦島八幡宮 宮司)

神主に成つて良かつた

山 浦 一 男

私は、前宮司の闘病と家庭の事情、そしてお宮の事情に依りまして、身の丈も省みませず、六十五歳の時に、このお宮を守らなければ、と、断腸の思いで、一大決心をし、神主の道へ進む事に成りました。

平成二十六年に直階、二十七年に権正階、そして指定神社神務実習と、堪忍袋の芋が切れんばかりの楽しい講習と修行のお陰様で、宮司の身分をも授からせて戴きましたけれども、日頃は掃除のおじさんと呼ばれています。

社家の育ちでも無い間に遭わせで、寸足らずの俄か宮司が、お宮の為に地域の為に、前宮司の為にその責務をきちんと果たせるのか、と、日々不安でしたけれども、自分を飾らず、そのままの気持ちで、お詣りに来られた方々や地域の皆さんとも接し、毎日勉強させられる事ばかりで、一年は過ぎ、二年は過ぎ、何年か経った四月のある朝、初々しい新一

年生たちの黄色い声が賑やかに鳥居の前を元氣に通ってくれました。

私はその日、参道脇の雑草たちと楽しく話している内に、ふと思い付きました。

将来は、この子供等にお祭りや太鼓踊り、そして役員さんに成って貰う大切な人材なんだ、この子供たちが、気安くお宮に来てくれる方法は無いものかと考えまして、四月十五日の月次祭から祭壇に飴玉を供えました。お祀りを終えまして、その飴玉を三方に盛り、社頭に備えました。

私が参道脇の雑草たちと遊んでいましたら、鳥居の前をスクールバスが通り、私はバスの中の子供たちに思いつきり手を振りました。

宮の前バス停で止まったバスから数名の子供たちが、鳥居から参道へ小走りで入って来てくれました。

その内の一人の子供が、鳥居の前でちょっと頭を下げながらゆっくり入って来ました。

他の子供たちは、社頭に着くといなや、三方の飴玉を驚掴みました。

最後に、先程鳥居に入る時少し頭を下げた子供が、神様に向かってちょっと可愛いく頭を下げて、一個だけ残っている飴玉を見てニコツとし、飴玉を手にしました。

私は、その瞬間胸がキュツと成り、君は、鳥居から入って来る時少し頭をさげて入って

来ましたねー。

誰に教えて貰ったのーと聞きましたら、お爺ちゃん、お婆ちゃん、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん達とお宮さんへ行った時に皆が頭を下げていましたので、僕も真似をしただけですけど、と、ひよいひよい答えてくれました。

私はその家庭の温もりをお腹一杯戴きました。今日はお宮さんに来てくれて本当に有難うございましたねーと、子供たちにお礼を言いました。

毎月、一日と十五日は月次祭と言って、皆が病気をしない様に、友達と仲良く、家族皆が朗らかに元気で過ごせます様にと、朝早く神様をお願いをする御祭なんですよ。

その時、神様にお供えした飴玉をここに出しておきますので学校帰りに必ず寄って下さいねー。飴玉は後から来た人達にもきちんを残す様にお願ひ致しますよーと、言ったら、一人の子供が神様が見とらすとですかーと言ったので、ハイ、そうですねーと答えましたら、神様は何処に居らすとですかーと、聞きましたので、神様はねーお宮の奥のずーと奥に居らすとよー、また、君たちの心の奥の奥にも居らすとよー、誰も見て居ないから大丈夫大丈夫と思い、良くない事をしたら、君たちの心の奥に居らす神様が、コラ、だめだよーと注意してくれますよーと言いましたら、子供たちは目を丸くして元気で帰って行きまし

た。

最近ではその子供たちが後輩達に神様の事、飴玉の事等いろいろと教えてくれて、私は子供たちから勉強させられる事ばかりでございます。

境内の美味しい空気を戴き、県内外の方々と一期一会に恵まれ、時には友達の話、夫婦の事、病気の事、縁談の事等、一方的に話を聞くだけですけれども他言する事無く、他にも海のように深い話が山の様にございます。

この様に幸せな毎日を私が独り占めするのは、とても、もったいなく自分の足元が、きちんと見える内には、このお宮さんを護って下さる方を求めて奔走していると、何の役もありません。私の様に寸足らずの男でも、自分を飾らず、やれば出来るんですよ、何の役にも立ちませんでしたが、私も私は神主に成って本当に良かったと心から思っています。

ここのお宮さんは、私に任せて下さいと、言う方が一日も早く現われて下さる事を願って止みません。

(熊本県 大島子諏訪神社 宮司)

自己と他者はどのように結ばれるか

— 作曲家 武満徹の考え方 —

永田 孝信

本日、お話しするのは日本の著名な作曲家で、平成八年に六十五歳で亡くなった武満徹についてです。この作曲家の創作活動と日本の伝統音楽との関わりを述べ、神道の国際化の手掛かりとなる事柄を考えてみたいと思います。

西洋音楽の作曲家であつた武満徹が、日本の伝統音楽に関心を向けた切っ掛けは、人形浄瑠璃文楽の公演を見て、西洋楽器とは異なる太棹三味線の特異な響きに感銘を受けたことです。それに触発され、武満は自分の作品に日本の伝統楽器を積極的に取り入れていきました。そのことが武満の内部に矛盾を生み出しました。それは日本人である自分が、なぜ西洋音楽を作曲するのかという、自己の立場、自己のアイデンティティーに関する問題でした。

邦楽器との邂逅と別れ

武満徹の伝統楽器を用いた代表作に、西洋のオーケストラに薩摩琵琶と尺八を組み合わせた作品（『ノヴェムバー・ステップス』一九六七年）があります。アメリカのニューヨークで初演されたこの曲について、武満は後に、およそ次のように振り返っています。

「この作品は、私にとって越えなければならないステップ（段階）であった。日本の伝統楽器とオーケストラとを対峙させることにより、どのようなドラマが生まれるのかを知りたかった。」

しかし、その後、武満徹は日本の伝統楽器を用いなくなり、「なぜ邦楽器のために作曲しないのか」という質問に対し、武満は「表面的な日本主義のようなものが、煩わしいものに感じます。音の響きの趣味だけに頼った耽美的な音楽を作ることに関心がありません」との旨を答えています。そこには、伝統楽器を用いることの危機意識がありました。

伝統楽器を用いることの危機意識

この危機意識について説明しますと、伝統楽器の中でも尺八や琵琶の演奏は、偶発的に生じた表現を大切にするため、予め楽譜に書き表すことができません。それは作曲家の側

からすると、音楽の創造に積極的に関われないことになります。つまり、名人と呼ばれるような優れた演奏家がいなければ作品が成立しないという、作曲家の存在意義に関わる問題意識でした。また、「琵琶や尺八の音は、既に完成された世界であり、そこに自分が何かを付け加えることは不可能に近い。」と武満は言い、もはや作曲家が関与できない状況を指摘しました。こうして武満は、伝統楽器を用いなくなつたのです。

伝統邦楽への武満の視点

その後、武満徹は日本の伝統音楽の本質について考察し、日本に留まらず、世界的なものになり得る要素として「サワリ」という特徴に着目しました。例えば三味線を例にとると、サワリは上駒かみこまから外された一の糸が棹の表面に触れて、うなり音を生じる現象（又はその仕組）を指します。このサワリの語源や意味について、武満徹は「他のものにさわる」ということから来ている。さわりの意味の一つは、他の流派の傑れたところを自己の流儀にとり入れることであつた。」と述べ、サワリが伝統邦楽の根本となる要素であり、同時に国際的なものとして理解され得る伝統音楽の核心と捉えました。

自己と他者はどのように結ばれるか

武満は、およそ次のように記しています。

「琵琶や尺八は明らかに日本であり、きわめて特殊なものだが、そこから抽象される本質は、もはや日本に限定されない。」

「世阿弥の能楽や芭蕉の俳句の世界は、既に日本という枠組みを超えたところにある。」

これらの言葉は武満が目指したものを明らかにします。武満は日本の伝統音楽に深く共感しながらも、伝統楽器そのものを自作品に取り入れることに限界を認めました。なぜなら伝統楽器は、日本の風土や文化、生活と不可分であり、そこを離れると存在の根底を失うからです。武満は、さらにおよそ次のように述べます。

「いま自己の内に発見すべきは、自己同一性アイデンティティではなく、むしろ他性アルタリテイ（他者を取り入れること）というものではないだろうか。そうでなければ、私たちは、日本人でありながら、何のために、西洋音楽をやっているのか。日本を見るなら、それを相対化して視なければいけない。」

武満の言う「他性アルタリテイ（他者を取り入れること）」とは、作曲家側からの一方向的な自己表現や自己開示から抜け出すことを意味していました。武満徹にとって「他者の優れた性質

の発見」は自己が生きることに繋がるものでした。

結語

武満徹は若い時に病弱であり、死を間近に意識しながら作曲を続けました。「音楽は沈黙（つまり死）に対する抗議だ」との言葉から、武満の人生と音楽は「生きることの意味」を探索し続けるものでした。他者を知り、自己と他者との繋がりを築き、やがて自他の区別が取り払われる中において、最も強く生きることでできると考えました。武満徹は、この「サワリ」の考え方を基に、オーケストラの音を厚く重ね合わせた独特な作風を築き、伝統音楽の精髓を伝えようとした。

武満徹の方法論は、神道の国際化を考える際にも活用できるように思います。神道には、祓いと禊ぎ、言霊思想、清き明き心、祖先崇拜、また習俗的な祭礼、さらには陰陽道、妙見（星辰）信仰などの多くの要素が含まれています。その中で何が最も重要な本質かについて、自らが考えることが大切だと思います。昨今、我が国の出生率が低下する中で、多くの外国人がそれぞれの宗教とともに日本で生活しています。神道をこの先も継承するため、神道を説明し、その本質を発展させていくことの大切さを感じます。これについての

愚見は差し控えますが、武満徹の自己と他者の結び付きに関する思索の跡を辿ることに、その手掛かりがあるように思います。ご清聴ありがとうございました。

(兵庫県 岡太神社 宮司)

希望 →これからの梶本神社

杉 本 泰 郷

こんにちは。当神社の宮司・杉本泰郷です。

私が宮司になり、早くも三年の月日が経ちました。まだまだ勉強しなければならぬことが多く、力不足を痛感している日々でございます。総代の皆さまには日頃より当神社へのお心寄せ、感謝申しあげます。

さて本日は少しお時間をいただき、総代の皆さまと梶本神社の明るい未来について考える時間にさせていただきますと思います。お付き合い、よろしくお願い申し上げます。

我がいの町も少子高齢化による過疎化が進み、人口減少が進んでいます。また梶本神社の氏子区域はいの町の中心市街地と呼ばれるエリアです。二十年前にはおよそ二千二百人であったいの町中心市街地の現在の人口は、およそ千七百人です。この二十年で約二十パーセント、人口が減少した計算になります。さらにこの先の二十年で半分、千人を切る

とも言われています。人口減少問題は全国の田舎町が抱えている問題であり、これと向き合っているのかにして神社を維持し、継承していくかが現代に生きる神職の使命だと考えます。

私がこれからの神職人生で主軸として務めていきたいのは「真の氏子」を増やすことです。「真の氏子」とは、「神社に心を寄せてくださる氏子」という風に定義させていただきます。そもそも氏子数というのは、神社が鎮座するその自治体の人口の数で表されます。その理屈でいくと、先ほど申し上げた数字から根本神社の氏子数はおよそ千七百人ということになります。しかし冷静に考えてみてください。千七百人全ての方が当神社に心を寄せてくださっているでしょうか。そんなことは絶対にありえません。なぜならその中には神社神道以外の宗教を信心している方も含まれているからです。また神社に興味がない、もしかしたら存在すら知らないという方もいるかもしれません。私はいま申し上げた後者の方々にこれから「真の氏子」になっていただきたいなと思っています。理屈っぽい話にはなってしまうますが、人口が減っていくからといって、必ずしも神社に思いを寄せる人の数が減るわけではない。いままで神社に興味がなかった、関わりが薄かった人に働きかけることによって神社に対して好意的、協力的な人を増やすこともできるのではないか、

と考えているからです。

ではいかにして新しい「真の氏子」を増やしていくか。そのキーパーソンは「子ども」だと私は考えます。教育と言ってしまうと大袈裟かもしれませんが、子どもの時から神社という存在が、生活の中に身近にある。また神社が子どもたちの成長過程で良い影響を与える存在になる。そういう環境を作ることが大切ではないかと考えています。

では具体的にどのようなようにして環境づくりを進めるのか。一つは子どもたちの楽しい思い出になるような場所を作ることです。幼少期の楽しい思い出というのは大きくなっても心に刻まれているものではないでしょうか。

当神社には池があり、鯉が泳いでいます。学校帰りの小学生たちが鯉の餌やりを楽しみに来てくれます。神社が放課後の遊び場になっています。

また屋台などが並ぶお祭りの非日常感も神社だからこそ体験してもらえる貴重な機会です。先日も夏祭りがあり、たくさん子どもたちで賑やかになりました。楽しい思い出になってくれていたら嬉しいです。このように神社という場所は楽しい場所であるというのを切り口に、神社の存在を身近に感じてもらえたらなと思います日々試行錯誤しております。

今後取り組みたいこととしては、子どもたちが自然と神社に足を運ぶ習慣がつくシチュ

エーションを作ることです。例えば、習字教室、学習塾などいわゆる習い事の場合が神社である。そうしたら神社に必然とくることになるので、もつと身近な存在になることができるのではないでしょうか。

このような取り組みを通して、彼らが「真の氏子」になってくれるのを願うばかりです。ここまでお話をした中で違和感を感じている方もおられるかもしれませんが。子どもたちが神社に足を運んでももらうことがゴールになっているのではないか。そのようなご指摘があってもおかしくはありません。私の考えといたしましては、彼らが大きくなった時に、神社の本当の意義を理解し、坤社の存在を大切に思ってくれるようになるのを信じるしかないと思っています。もちろんその過程では、神社はどういう場所であるか。神様はどんな存在であるのか。など神社神道にまつわることを教えていく必要もあると思います。しかし神社に足を運んでももらえないとそのような機会すら得られません。とにかく子どもたちに神社に足を運んでももらう。身近になってもらう。まずは「真の氏子」になってもらうきっかけ作りが大事ではないかと私は考えます。

最後になりますが、本日は「子どもたち」に焦点を当ててお話をさせていただきました。無論、日々の神事や他の年齢層の方々への対応を蔑ろにするわけでは決してございません。

今回は神社を維持・発展、次の世代へ継承させていく義務のある一人の人間として、将来を見据えたお話をさせていただきました。神社を通して、人を思いやり、心豊かで明るい日本にしていけたらと思っております。

なにか皆さま方よりご意見があれば遠慮なくおっしゃっていただけたらと思います。短い時間ではありましたが、御清聴ありがとうございました。

（高知県 梶本神社 宮司）

祈りがつなぐ家族の絆

村上 浩基

本日はご参列いただきました皆様とともに、改めてこの場を借りて故人の為に弔意を捧げたいと思います。

神道の祖霊祭というのは、読んで字の如く「祖先の靈魂をお祭りする」と表しまして、簡単に申しますと、ご遺族の皆様方がお祈りを捧げることによって、故人の魂を年月をかけて、一家の守護神とするためのお祭りとなっております。

法事では一周忌のことを「むこわれ、むかわれ」と言うことがあります。

諸説ありますが、回り回って報いること、お迎えにくるという意味があるそうです。

本日、ご多忙の中お集まりの皆様方におかれましても、先立たれた故人の御霊に玉串を捧げ、丁重にお祭りするということは、この「むかわれ」のお祭りにおいて大変意義深いものであると考えております。

私は奉職させていただいて、もうすぐ二十年となりますが、神主といえは地元の氏神様に神饌と言われるお供えを捧げて、祝詞を奏上し、日頃の感謝と子孫繁栄や五穀豊穰といった祈願をするというイメージがあるかと思います。皆様方におかれましても、各々のご家庭でのお祭りのやり方というものは色々あるかとは思いますが、私は祭祀の本分に關しましては主に大きく分けて「過去、現在、未来」とそれぞれ三つの「むかわれ」の祈りがあると思います。

まず一つ目の「むかわれ」は「過去に報いる祈り」です。

こちらは「報本反始」と申しまして、祝詞の書き出し文にあたります。本に報いて始めに反ると表し、天地の始めに思いを致し、ご先祖様に対して日々の感謝の気持ちを伝えるための「過去に報いる」祈願であります。

人生を振り返ってみますと、オギャーと生まれたとき、まず最初に出会うのは、十月十日お腹で育てて下さったお母さんです。

まだ目の見えない赤ん坊にお乳を含ませ、それからずっと独り立ちするまで見守ってもらい、成長と共に周囲の方々とのご縁、恩師や友達などのかけがえのない心の出遇いもあり、私共は支え合って生きることによって、ようやく自分が完成されていきます。

なかなか言葉では実感しにくいですが数字にいたしますと、仮に片親側だけで過去に十代も遡りますと、二の十乗で実に千二十四人ものご先祖様が魂のリレーをされ、ようやく自分にたどり着くことができます。

そのご先祖様達にも、過去に共に泣き、共に笑い、共に支え合えあつた唯一無二のご縁というものが無数に存在しているはずです。

その間にもし一人でも欠けていたのなら、今の私たちはここに存在していません。

改めてこの機会に先人達から遺された貴重な教訓や、彼らが築いてきた歴史や伝統文化を「報本反始」の精神で振り返ることで、彼らから勇氣や努力を学び、今を生きていく私たちの支えとなります。

そして二つ目の「むかわれ」は「現在に迎える祈り」です。

お盆にご先祖様の御霊が我々の現世に帰ってくるとよくいわれますが、一族の守護神であるご先祖様からうけたご加護と導きを迎えて、日々の営みを送る私共の絆に感謝する祈りです。

さて私も長らく奉職をさせていただきまして、葬儀の回数も重ねてまいりますと、様々な家庭に出会うことがあります。

神道ではご遺族の方からお伺いした故人の略歴をもとにしまして、生前の生き方のご様子や、人生の功績に焦点をあて、神職が葬儀のさいに誄詞（しのびことば）として奏上致します。

誄詞は分かりやすく諭えるなら、魂のリレーを繋いでくださった故人に対してご遺族から感謝の気持ちを伝える「最後の表彰状」という表現が近いのかもしれませんが。

その誄詞を作成するときにご遺族から少し時間をいただいてお話を聞かせていただくことがあります。その中で故人のお人柄はもとより、支えてきたご家族や地域や職場などの周囲との繋がりがふとみえてくることがあります。

昨今は身寄りのない孤独死、孤立死の社会問題化について度々ニュース等で取り上げられております。親戚家族に見守られて、というケースばかりではありません。

しかし、私はたとえ大勢の会葬者がいても、身内だけがみ合いを起こしてばかりで、故人を偲ぶ人が誰一人もいなければ、それもまた、孤独死ではないかなと思うのです。

祖霊祭は祖先との繋がりを感ずるだけでなく、この場を通じて、親戚家族が一堂に集まり、故人に対し共に思いを寄せて共に偲ぶことで、改めて今を生きる私たちが助け合い、支え合う大切な存在であることを再認識できる貴重な機会でもあります。

いくなれば過去の繋がりは、ご先祖様が魂のリレーをして繋げてくださった「縦のご縁」で、今ここで共に故人の為に祈っている皆様方の繋がりは「横のご縁」であろうかと思ひます。共に迎える祈りを捧げることで、これからこの絆を大切にしたいと思ひます。

そして最後の三つ目の「むかわれ」は「未来に向かう祈り」です。

こちらは次代を担う子供たちが益々笑顔になるようにという願ひを込めた、未来に向けたお祈りでございます。

お墓で喻えてみるなら、仮に大金をかけて、立派なお墓を建てたとします。しかし、もし後に続く人間が未来永劫に消えてしまったら、どうなるか考えてみて下さい。

私の家のお墓のすぐそばには竹藪がありまして、竹というのは生命力が強く、地下茎で根っこが繋がっていますから、タケノコになる前に根っこを刈っておかないと、やがて何年もほったらかしていると、竹が墓石をなぎ倒して、墓地が傾いてしまうんですね。

常日頃お墓参りに足繁く赴いている方ならばご想像ができるかもしれませんが、どんな立派なお墓であっても、手入れをしなければ、田舎の墓地は一夏たてば草茫々に荒れ果ててしまいます。実際に二百年以上続く庄屋さんの大きなお墓が近くにあったのですが、現

在では後続く方が手入をされなくなつて、墓地の一部が傾いて、ほとんど荒れ放題のジャングルになってしまつています。

始めに神葬祭は物事の始めに報いるという「報本反始」の「むかわれ」のお祭りであると申しましたが、同時に現在を生きる私たちにとっては、自分たちが迎えたご縁を、次代に受け継ぐ「未来へ向かう」祈りでもあります。今を生きている皆様方が子供たちの為になにが出来るかということと共に考えていただきたいと思ひます。

改めて申しますが、ご先祖様から将来を担う子供たちに、過去、現在、未来と続く祈りのバトンを繋ぐためにも、本日の祖霊祭を機に改めてお互いの絆を再確認し、子供たちの笑顔のために、いたわりをもつて家族や地域との信頼関係を築くことの大切さを感じていただければと思ひます。

最後になりますが、神葬祭はただ故人を見送るだけの儀式ではありません。

故人の魂を心に刻み、今を生きる私たちが後世に残していく祭りでございます。

「過去に報い、現在を迎え、未来へ向かう」この三つの「むかわれ」を頭の片隅に入れていただいてご祈願していただければ幸いです。

故人の喪失によって心に残る切ない痛みは生きていく上で避けられません。

しかし、皆様一同が命を繋いで下さったご先祖様達に、共に手を合わせ、共に頭を下げ
て、感謝の心を手向けることで、やがて守護神となりゆく故人からの絆を感じ、未来に向
けた力強いメッセージを感じる事ができるかと思ひます。

どうかその事に想いを寄せていただき、私からの挨拶とさせていただきます。

(山口県 花岡八幡宮 禰宜)

お客様は、神様です

伊 賀 昇 三

皆様、こんにちは、本日は〇〇から商店連合会の皆様にご参拝をいただき。社頭講話と
いうことで、演題は『お客様は、神様です』、聞いたような言葉ですね。そう昭和歌謡界
の神様、三波春夫先生がご生前に語られた言葉が有名ですが、最近は「お客様は神様だろ
うがー」みたいな、所謂クレマーが間違った意味で使用されているような気がします。
本来はどう言う意味なのか、私なりのお話をさせていただきたく存じます、どうぞよろし
くお願い申し上げます。

では、先ずは景気付けに

ぼんち可愛いや寝んねしな

品川女郎衆は十匁

十匁の鉄砲玉

玉屋が川いすっぽんぼん

これは、「博多どんたく」で唄われる「ぼんちかわいや」という歌でございます。博多どんたくは毎年五月三日、福岡市博多区の街中、川端商店街というところを中心に行われているお祭りなのですが、先日、私、博多どんたくに行って参りました。といいますか参加したんでございます。コロナで三年ぶりの「どんたく」開催、それはもう博多は大変な賑わい、人出でございました。

そもそも「どんたく」という名前は、オランダ語でZONDAG（ゾンダーク）、ZONは太陽、DAGは日曜日、「太陽の日曜日」と云ったところでしょうか。だからでしょうか、「どんたく」は雨が多いんですね、「晴れますように」なんて意味なんでしょうか？ まあ、違うでしょうが。

さて、「どんたく」は、平安時代の頃から始まったらしいのですが、明治ころまではどんたくとは言いませんで「博多松囃子」と言っていたそうです。博多も昔はビルが建ち並んでいたわけでは無く、博多湾の西は糸島「生の松原」から東は箱崎の「千代の松原」と、白砂青松、白い砂浜に松原が青々と生い茂っておりまして、そこに幕を張りましてご馳走やお酒を持ち込んで、三味線や太鼓、唄や踊りなど飲めや歌えの大騒ぎ、カラオケなど無

い時代の話、その賑わいでお囃子として演奏された曲が「博多松囃子 ぼんちかわいや」、この曲を弾きながら唄いながら博多の街中を練り歩いたお祭りが、明治の頃に「どんたく」と呼ばれるようになったそうなのですが、そのへんの難しい説明はウィキペディアにお願いするとして、

現在では、歌舞伎公演などがあります博多座前の大通り「明治通り」を会場としてたくさんさんの団体が各々の格好で音楽を鳴らしなが、パレードしますのを、一般的に「どんたく」と云っている訳でございます。ですからいろんな団体がありまして、普通に民謡や日本舞踊の団体ならば良いのですが、流行のブレイクダンス有り、エアロビクス有り、まあこれも唄や踊っているならまだ良いのですが、踊らないで手を振るだけのテレビ局の番宣や企業の広告、更には平和や反戦を叫んだり、うん、オカマちゃんは無敵ですね、まさにカオスなパレードなんです、取り分け沖繩のエイサーの団体なんぞは、たくさんさんの太鼓を持ち込んで「イヤーサーサー」なんて力強くやっております、関東当たりから、どんたくを見に来られた方などは、これを見て「いやー九州は熱いねー」なんて感動されたりしてまして、「それ沖繩なんです、博多どんたくは、そんなでは無いんですが」と言っあげたい気持ちになったりしているんですが…。

話がズレてしまいましたが戻しまして、私が参加したのは、その大通りのパレードではなく、今では、数少なくなりました先程の「博多松囃子どんたく隊」でございまして、「小唄」「端唄」と「三味線」の小さな会なんです。午前中に川端商店街まで歩いて十分のところにあるお稽古場に集合致しまして、着物に着替えて、いざ出発。「しゃもじ拍子」と「三味線」の演奏で、先程の「ぼんちかわいや」を唄いながら、商店街までご町内を練り歩く。そして道々ご最良筋のお店やお宅の前で唄と踊りのご披露をする。ご最良筋から御礼に御祝儀と振舞酒と肴を戴いて、グイーっと一呑み。また次のご最良筋のお店に唄いながら移動する。そんなこんなを十数軒、博多中洲や天神で練り返し、夕暮れ時、道中の振舞酒でいい気持ちになりました。なかには唄っているのか、ぼやいて居るのか訳がわからないくらいボロボロの方もいたりして、だがそれだけでは終わらない。更に近くの料理屋に行きまして、戴きました御祝儀で飲めや唄えの大騒ぎ打上げをさせていただく。んん、只の飲んだくれの酔っ払いのお遊びなんですが…。

これをですね、大通りのパレード組と違いまして、「博多どんたく通りもん」と呼んでまして、「通りもん」、どこかで聞いたことはありませんか？

そう、「傑作饅頭・通りもん」明月堂さんの空前のヒット商品「通りもん」の名はここ

から来たんですね。

さて、「この通りもん」、単なるぼったくりの酔っ払いかと思いきや、さに非ず、道々行き交う人々は手拍子でにこにこしながら見送ってください。また一緒に歩いて唄ったり踊ったりと楽しんでくださる方、周りの子どもたちもお母さんといっしょにキャツキャ言って喜んでいらつしたり、中にはお婆ちゃんなんか手合わせて拝んだりしてらつやる。そして一軒々々お店の前で「祝うたー、祝うたー」祝うって言っているんですが、と囃し立ててお伺いすると、もうお店のご主人待ち構えてらして喜んで迎えて下さる。正にお客さんに囲まれて笑顔と拍手、有難いなあとと思うわけでございます。だから、つたない踊りではございますが、こちらも一生懸命に踊りを舞わしてもらう。そうすると気づいたのですが、川端商店街のお店って縦長のお店が多いんですが、どこのお店も正面に神棚が祀ってあるんですね。商売繁昌のお札がダーンと立てかけてあるんですね。そう、近くに「山笠があるけん博多たい」で有名な櫛田神社さんがあり、皆さんその氏子さんなんですね。私はその神棚のお札を見ましてね「あっ！、敵陣に乗り込んだじゃった」いや、そんなことは思わないですよ。「あー、神様が笑ってらつしゃる、神様が喜んで下さつてい

る」、有難いなゝって思ってたんですね。「んゝ、神樂し」、これ、もうある意味「お神樂」なんですね。そう思うと私も幸せ一杯な気持ちになりました、どんたくの「通りもん」やつて良かったなゝ、三年振りに再開してよかたなゝって思ってたんですね。それでその時、私は「神様に見てもらおう、神様に喜んでらおう」そう思つて更に一生懸命に踊ったんですね。正に「お客様は、神様です」そう思ってたんですね。ああ出てきましたね今日のキーワード。そう言う事なんですね。

そうして一通り唄つて踊りましたら、またたくさん拍手を頂いて、そこいらじゅう笑顔が一杯になつてまして、そして「祝うたゝゝ、祝うたゝゝ」と言つてまた次のお店に行く、商店街を少し歩いて行列がついて来ているかなゝって思つて後ろを振り返りましたら「なななんと!」、今しがた踊ったそのお店は大繁盛、お客様が一杯なのです。「通りもん」恐るべし。いやいや神棚が祀つてあるからこそ成せる技なんですねゝ。神棚恐るべしです。

皆さん、お店に神棚ありますか?ちゃんとお札をお祀りしてますか?、地元の氏神様と、お伊勢さんの天照皇大神宮様のお札。毎朝お水を替えて「先ずは、神様がお客様、神様に喜んでもらおう、楽しんでもらおう」そんなふうな事を思いながら、毎日をお過ごししてい

ただ、今日一日を頑張っていたくと、皆さん、必ずやいいことがある、幸福せが訪れるんではなからうかと思うわけでございます。

商売繁昌 大繁盛

家内安全 大安全

無病息災 大安心

以上「お客様は、神様です」のお話でございました。

神棚をお祀りせなあきませんね。

昔からの文化や伝統は残さないといけませんね。

ありがとうございます。

(鹿児島県 鹿児島神宮 榎宜)

抑も

山下 裕嗣

さて、俳聖と呼ばれる…アッ！難しい言葉ですね。俳は俳句の「俳」聖はひじりですね。ひじりでもピンときませんねえ…。聖者の行進という音楽がありますが？判りますか？…うゝん、京都の八つ橋の老舗で聖護院というお店もありますが…。まあピンとこない方はあとで調べて下さい！…で、「聖」とは、徳が高くあがめられる人。天下のことを知る人とありました。余談ですがこのお話を作る際に、初めて調べました。…ホント勉強になりました。まあそれはどうでも良いとして、俳聖と呼ばれる俳人、松尾芭蕉が「奥の細道」を旅する中で得られたものとして、「不易流行」という概念があります。「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」というものです。「不易」は変わらないもの、変えるべきではないもの、変えられないもの。「流行」は、世の中の変化と共に変わって行くもの、時代の流れと共に変えるべきもの。更には、未来に向けて変えなければ

ばならないもの。であると思います。

私も田舎神主は、この不易の部分を大いに担っていると思いますが、では何が不易なのでしょう？少なくとも人々が神祀りを創めた頃と今では、生活環境から生活習慣などほぼ全てが変わっているのではないかと思います。その中での不易。変わらないもの、変えられないものは何かを考え、更にそんな中でも、芭蕉の言う、時代に即して変えて行かなければならない流行にも、心を置かなければならないのではないのでしょうか？戦後から加速度的に時代の流れが速くなってきました。近年は特にその変化が顕著です。不易を考える時、ただ変えなければ良いというわけではありません。そこには理由や事情があることを知らねばならないのだと思います。

そこで、抑もという考えが大事になってきます。実は時代に流れと共に、気が付かないうちに変わっているものや、変わり始めているものがたくさんあるのではないのでしょうか？今回は皆さんと一緒に、抑もを考えてみたいと思います。

ではまず、抑も私どもの神道ってどんなものなのでしょう？神道の大元の心はどこに由来するのでしょうか？

まずは「神さま」。私共日本人は、全てのものに魂が宿ると教わってきました。人間や

動物は元より、小さな虫…一寸の虫にも五分の魂…、大自然の中にも山をご神体と仰ぐものや、大きな木や大きな岩に神様を見出すもの、小さな植物、お米の一粒に至るまでに魂の存在を感じて生活しています。この魂がイコール神さまであり、大自然の中の全てを八百万の神々として崇め畏れてきた心が神道の根源なのだと思います。…今ほど、崇め畏れと表現しましたが、この畏れを神様のことととらえるのも日本人独特の信仰なのだと思います。世界宗教であるキリスト教には、唯一絶対、全知全能の神「ゴッド」が存在し、対照に悪というマイナスの存在があります。仏教においてもお釈迦様を中心に、諸神諸仏が存在しますが、仏教では「天」と呼ばれる神々は、お釈迦様のお手伝いをする味方であり、「魔」と呼ばれる悪者は、お釈迦様の修行や活動を阻止しようとする敵です。しかしどちらも輪廻転生を繰り返す人間と同じ扱いなのだと言われます。また難しい言葉が出ちゃいましたね。輪廻転生については詳しくは申しませんが、仏教では「天上」から「地獄」まで六つの世界を生まれ変わるといふ思想があります。お釈迦様は絶対であり、その他の「天」「魔」「人間や動物（畜生）」は、永遠に生死を繰り返し、すべてはその時の行いに応じて生まれ変わるといふ思想の中にあります。…少し話はそれましたが、キリスト教も仏教も、ここでは詳しく説明しませんでしたがいسلام教に於いても、唯一絶対の神や仏が居られ、

その他が災いを及ぼす悪の存在なのであります。

では、私どもの神道はどうなのでしょう？ 全てのものに神様が宿り、全ての事はその神々の力によつて、良くも悪くもなるといふものです。祝詞の中でよく使われる言葉に「禍津神の禍事有らしめ給はず」という言葉があり、悪い方向に誘おうとする神様の方に向かわないようにと祈るわけです。さらに話を戻して、では神道とは何ですか？ 文字通りに神様の道ですが、我々は神様ではないのですよね？ ではこの道は神様のための道なのか？ 我々の生活の中にある神道は、神ながらの道であり、この世のすべてに宿る神様のお心のままに、我々が歩むべき道なのであります。時には思わぬ方向へ誘おうとする神様の心があるのかもしれませんが。時には戒めの方向に誘う神様がいらっしゃるのかもしれませんが。しかし、常に敬神の心を産土神や氏神様という守護神に向けて、お護り頂く事により、あたり前の、より良い生活に誘って頂く事が神道の基本なのではないでしょうか？ 私どもの神道の不易は、産土神や氏神様をしっかりと心に頂く事なのだと思います。

本日は時間がございませんので、簡単に申し上げますが、ではそこにある流行は何でしょうか？ 全国には多くのご崇敬を集める神社神宮が多数ありますが、自分の心へ誘われ、導かれて参拝を重ねるこれらの神社への参詣が、流行なのだと思います。御成敗式目にこん

な言葉があります「神は人の敬いによつて威を増し…」多くのご崇敬を集めるお社の神様のご神徳は計り知れないものがあります。その大御心に惹かれてお参りする事は大事なのですが、その礎には産土神や氏神様がいらつしやることをお忘れないように…。

うまくまとまりませんでした。が、氏神様を大事にせよという、田舎神主のお話でした。

(石川県 白山神社 宮司)

猫は人が育ててもニャーと鳴く

河本文夫

皆さん、東昇先生という先生のお名前、聞いたことありませんか。京都大学の名誉教授で、日本ではじめて電子顕微鏡をおつくりになった先生です。この東先生が、猫は生まれてすぐ人が育てても猫に育つ。犬は生まれてすぐ人が育てても犬に育つ。ところが、人間は人間の子に生まれたからといって、人間に育つとは決まっていない。今日の学者の定説では、育て方により約五千通りの可能性を持つて生まれてくるとおっしゃっているんです。

東先生のそのお言葉に、思い出しましたのは一九二〇年、インドで狼に育てられた狼少女が発見されたと言う話がありましたね。二人の少女は狼の群れと一緒に四足で走り回っていました。話す事は出来ず、夜行性の狼たちと同じように、夜、真っ暗な中でも良く眼がみえたとありました。

しかし言えることは、人間は育てる環境が大切だということは言を待たないことでしょ

う。育て方により約五千通りの可能性のある人間。言葉で人は生きもし死にもするといひます。言葉に内包された霊力を言霊といい、日本には古くから言霊信仰があり、良い言葉は、人に活力を与え、人の心を動かす力があり、生きる力を与えるものです。

さてここに紹介する話は、その一言が人生に大きな心の支えになっていき、そしてその人の持っていた才能の扉が開いたという話です。

此处にその方の和歌を紹介しましょう。

襖められし　一つの事の　うれしかり　命愛しむ　夜の想いに

この歌の作者は中村覚という人。彼は朝鮮で生まれ、父は厳格な警察官で、父の仕事の関係で彼は幼い頃から朝鮮や満州を転々とした。署長を務めるなど家は豊でしたが、彼は子供の頃から病弱でカリエス、蓄膿症、中耳炎を患うなど持病を持っていました。

終戦で、一家は故郷、新潟県柏崎に引き揚げたのですが、終戦を境に父親が公職追放となり、家は貧しくなる一方、優しかった母は十三歳で亡くなってしまふのです。

持病を持つ彼は小学校の時も中学校の時も、勉強の一番できない、つまらない子どもと

して、皆からもバカにされ、無視され性格がすさみ転落の人生が始まり犯罪に手を染め少年院にも送られました。

そして昭和三十四年、ある雨の晩、余りの空腹に新潟県小千谷の一軒の農家に押し入り、二千元を奪い家族と争いその奥さんを殺し結局死刑を言い渡された。

牢の中に入れられ、彼は自分の人生を振り返ります。小学校、中学校時代を思い出してみても、誉められた事は一度もない。処がただ一度、中学校の美術の先生から、

「絵はへたくそだけれども、絵の組み立ての構図はお前のが一番いいぞ」

と褒められた事がただ一度あったのが思い出されました。

獄中でその先生が無性に懐かしくなって、牢の中で先生に手紙を書きました。

それがこの手紙の要約です。

「先生はとても僕のことなんか覚えていてくださらないと思いますが、僕は今、死刑囚として最期の日を待つ身の上です。小学校、中学校を思い出してみても誉められたことな

んで一度もありません。でも先生から、「絵はへたくそだけれども、絵の組み立て、構図はお前のが一番いいぞ」と、いわれたことが嬉しくて懐かしく思い出されるだけです。何のとりえもない撲ですが、せめて先生のお言葉を胸の中に大切に大切に最期の日を迎えたいと思います」

そのような内容の手紙を書いたんです。其の先生は美術の吉田好道先生。

中村からの手紙を受け取った吉田先生はこの生徒のことをほとんど覚えていませんでした。しかし先生はその手紙を手にし、机の前で座ったまま、その内容と自分のかけてやった、たった一言を忘れなかった教え子に先生は涙するのです。そしてその手紙に内容の重さにじっと動けず昔に思いを馳せるのです。

その後姿を見た奥さんが、

「お父さんどうしたの」

「これっ」

っと、その手紙を奥さんに手渡されるのですが、奥さんも読まれそして、

「あなた！　すぐお手紙書きましょうよ」

そして返事を書かれるんです。

名前も覚えていてもらえないと思っていたのに、先生が返事をくださった。その先生の手紙の中に、中村が育った新潟県の柏崎市のことを詠んだ歌が三首ばかり書き添えてありました。（先生の奥さんは歌の会の会員でした）

それを読んでいるうちに故郷が懐かしくなり、自分でも歌が詠みたくなり、それから拙いながらも次々に歌が生まれてくるのです。それから奥様と歌のやり取りの手紙が交換されるのです。

そのうち手紙に書かれ戻ってくる何首かに奥様が才能を感じ取り、そして彼に「島秋人」という歌人名を与えました。「島」は彼がかつて住んでいた島町から、「秋人」はしゅうじんと読めるのがその由来であります。

「たすからぬ生命と思えば一日の小さなよろこび大切にせむ」

「たまわりし処刑の日までのいのちなり心すなおに生きねばならぬ」

先生の奥様との手紙のやり取りは、その後続くのです。

そして毎日歌壇（毎日新聞）において入賞するなど、素晴らしい歌が次々に生まれてくるものですから、歌の会からなんとか島秋人君の歌を一冊の本にして出そうじゃないかという運動がおきました。が、しかし、死刑囚の歌が本になって世間で騒がれたのでは、被害者の遺族の方が、どんなやりきれない思いをなさるでしょう。もしも本にしてくださいなら、どうか私が死刑になつてからにしてくださいとお願いして、実際、島さんが死刑になつてから、この歌の本が出版されているんです。

これがそうです遺愛集。（実際の本を皆さんに見せる）

そして、いよいよ最期の夜は、彼は夜通し眠らずに、お世話になつた方々に、私のようなしようない奴を、ご親切にお導きいただいたとお世話になつた方々に感謝の手紙を書き続け、死刑になる直前には、被害者の遺族の方宛に、

「とても私が死んだからといって、お心が慰むことはないと思いますが、どうか奥様の墓前にとうとうあいつも処刑されたぞ」

とご報告申し上げてください、という遺書を残します。

そして当日、処刑の日にも歌を読みます、辞世の歌です。

〃土ちかき部屋にうつされ処刑待つ、ひとときあつきいのち愛^{いと}しむ〃

絞首刑の台に進み、彼は、そこで自分の身体を触ってみるんですね。

自分の体が温かい、あー命って愛おしいな、生きているってことは素晴らしいことだな。っと心から思われたのではないでしょう。そして死刑執行の時が来ます。

小菅刑務所（現在の東京拘置所） 昭和四十二年十一月二日 享年 三十三

あなたのたった一言が、沈み込んだ人に生きる命を与え、身も心も清められるかもしれません。

そう、あなたの一言が!!

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

G7 広島サミット

村田和之

今、世界中で大自然が犯され、自然災害がおきている中、我々人間の、世界各地で争がおこり、戦争がたえない時代となり、第三次世界大戦が始まるのではないかと心配されるこの頃となつてまいりました。

人間の命が、こんなに安く奪われ、ロボットやゲームの如く簡単に命が取り替えられようとは……。

実に恐ろしいことになりました。

狙撃される日本の首相、アメリカのように宮島に大統領専用のヘリポートを作ったり、一カ月前より、シークレット・サービスの大使館員の万全の護衛や準備があればこそ、事無きを得るのであります。

日本の国は祖先を崇拜し、自然をも大切にし、神が宿っていると迄信じてきました。

中でも太陽は、平等にエネルギーを発し受けて、使用料金も払わず、ただで、好きな程使用しているのです。

万が一、太陽がそのエネルギーを発せず休んだならば、世界中の生物は一瞬にして即死してしまうのであります。

去る、令和五年五月十九日より二十一日迄世界で初めて被爆地・広島でG7・広島サミットは開かれました。

核兵器廃絶を議論する舞台に、広島ほど相応しい場所は無いとの思いが実現したものであります。

G7とは、フランス・米国・カナダ・ドイツ・イタリア・英国と日本の七カ国で、欧州連合の大統領や欧州委員長、又、招待された国、時の人、ウクライナのゼレンスキー大統領も対面出席しました。

広島開催に相応しく、原爆資料館・慰霊碑・原爆ドームと巡りました。

私も広島の被爆者、他県の友人等、多数の人等を案内することがありますが、私の場合、今迄最初に一度案内しただけで、以後、毎回入口迄案内し資料館内には入らず、出口で待つています。

なぜなら、私は当然四歳と五カ月の小さな子供の身でしたが、当時の状況は、よく知っているからであります。

私の家は、川の多い太田川の渡し舟の船着場の近くにあり、舟から下りた被爆者が、市内の救急場所に行くには、どちらに行けば良いのか道先案内の為に話しかけて来るものを、あまりに、むごい姿に恐ろしくて逃げ回っていたことを今でも思い出します。

何せ、素ぱだかの姿で、男か女の区別もつかず全身一皮むけて紫かかった全身で、両手先から皮膚がたれ下っている姿で話しかけてこられるので、只恐ろしくて――逃げるばかりでありました。

父も役人であったので先生一人を従い学生に、当日の奉仕作業の手順を話している時被爆、生徒は一人も残らず吹き飛び、先生と父二人のみ生き残り、先生は前面を父は背中を被爆、背中に衣類のモメンの跡が背中に焼き付き、跡が残っていました。火葬場に散らばっている人骨を持ち帰り粉にし練って傷口につけていました。

川土手に散らばっている死体を寄せあつめ、油をかけて火葬にする等、色々体験し見ているので資料館内で見える必要は無いと思つたためであります。

日本でのサミットは、

一九七九年初めて東京で開催、次いで

一九九三年

二〇〇〇年

二〇〇八年、そして二〇一六年伊勢・志摩で安倍首相の時開催、そしてサミット終了後、当時のオバマ米国大統領が初めて広島市を訪ね原爆資料館を約十分間見学、いくつかの展示物を準備しましたが、ゆっくり見ることもなく「ちらちらと見ただけ」に終わりました。ただ一つ、千羽鶴だけ記念に折って帰りました。

当時、バイデン米大統領は副大統領の立場

米国にとっては二度目の広場訪問で注目をあび、本国より、「オバマ大統領の時より余分な時間を取らないように。」と強い指導があり、オープンには報道されませんでした。今回は時間オーバーで四十分間滞在されました。

国と国との争いの末、米軍が落した一発の原子爆弾で一瞬の内に十四万人の広島市民は無差別に命を奪われたのであります。

今、ロシアのプーチン大統領は、ウクライナに向け、核兵器使用をちらつかせて、国際刑事裁判所からプーチン大統領に逮捕状が出ているにもかかわらず、おかまい無しの態度、

二〇一六年広島を初めて訪ねたオバマ米大統領は、

「共に平和を広め、核兵器のない世界を追及する、勇気を持ちましょう」と芳名録に記されました。

八年後の今年、二〇二三年五月十九日、オバマ大統領を継いだバイデン大統領は広島サミットの芳名録に

「この資料館で語られる物語が、平和な未来を築くことへの私たち全員の義務を思い出させてくれますように世界から核兵器を最終的に、そして、永久になくせる日に向けて、共に進んでいきましょう。信念を貫きましょう」と記されました。

核保有国の米・英・仏の首脳が資料館を視察し被爆者の肉声を聴いた、核兵器による悲劇を再び起こさないために、核なき世界へむけ一歩踏み出したのであります。

「世界八十億の民が全員、ヒロシマの市民となった時、地球上から核兵器はなくなるだろう」。

核兵器を使わない、核兵器で脅かさない、人類の生存のために。

カナダのトルドー首相は、サミットが済んで二日後、再度資料館を見学しました。

バイデン大統領は千羽鶴を二羽別に持参し、一人四羽づつ折った鶴と合計六話の千羽鶴

を残しました。

こうした代表の様子を見ても少しづつではあるが、核兵器廃絶の動きを感じるのです。
あります。

来年は六月、イタリアで開催されます。

「わが国は神のすゑなり神まつる昔の手ぶり忘るなよゆめ」。

太陽を始め自然の中にも神を感じる日本、目覚めよ核なき世界になるため我らが日本。

(広島県 長束神社 宮司)

神道と稲作

幡生隆太郎

私は兼業神職です。平成二十三年に先代がリタイヤして欄宜から宮司に昇格し、いよいよお宮の運営を一手に引き受けることとなりました。公務員の兼業は許可が必要です。「神社は農業と関係するから農業委員会に出向して無報酬ならOK」ということで許可を受け、ラインから外れて、長い間、農業委員会に在籍しています。退職まであと二年、たぶんこのまま農業委員会で公務員を終わると思います。ですから今日は稲作の話をいたします。

私のところのお宮から眺める田園風景は本当にすばらしいです。先代の宮司の時は、隣接地に廃屋があつて視界をふさいでいましたが、私の代になって、その廃屋を取っ払い、お宮の周辺の田んぼを見渡すことができるようになりました。面積は三十町歩、その内、半分の十五ヘクタールで耕作が行われています。残りは耕作放棄地です。農家は、高齢化、

後継者の不足などにより、年々減少し続けています。また、残った農家もほとんどが兼業で、専業農家は姿を消しました。

正直言つて、「もうこの風景も見られなくなるかな」と思っていました。が、なんと、つい先日、お宮周辺の五つの集落が力を合わせ、農事組合法人を立ち上げました。名前を「四本松」と呼びます。江戸時代、氏子区域を治めていた厚狭毛利家（長州毛利藩の家老）の別称をいただきました。農事組合法人の設立には、利害関係者からの出資金が必要ですが、私も組合員になるため、一口八百円、最低十口のところを、妻に内緒で百口の八万円程出資しました。

ここで、和風月名の話を少しします。五月から七月は、稲作に関係した和風月名になっています。五月は「早苗を植える月で、さつき」、田植えが始まる月のことです。六月は水無月といい、水の月、「無」は「の」を意味するとのことで、田植えの最盛期です。そして、七月は文月と言つて、その由来は、「稲の穂が実る月、穂含月（ほふみづき）」とされています。

水無月、田植えが終わると集落の農家はお宮に参り、「代満て」という神事を行います。「代」とは田んぼのことで、田植え前に田んぼを均すことは「代掻き」と言います。「満て」は「田んぼが苗で満たされた」と言う意味です。この「代満て」で奏上する祝詞の趣旨を簡単に説明すると、「今年もどろまみれになって大切な稲の苗を植えました。どうか風水害や昆虫の被害に遭わず、立派な稲に育ってください。」というものです。

私がおよそ三十年前に彌宜として奉職したときは、氏子区域を構成する二十の集落の内、その半数の集落で「代満て」が行われていました。六月中旬から七月上旬の週末は、毎晩、盛大な直会が催され、生来「下戸」の私の盃洗が満杯になる程、御神酒が酌み交わされました。このような中、昨年、とうとう「代満て」を行う集落はなくなっていました。

このように、農耕と氏神様のつながりは、本当に薄れて来ていると痛感していたところ、実は、去る七月一日に、冒頭で話した農事組合法人、四本松の十三人の耕作者がお宮に上がって来られ、「代満てをやるから祝詞を上げてくれ」と言われます。本当に嬉しくなつて、

祝詞を引っ張り出し、榊を採りに行つて神事を行い、久しぶりに盛大に直会を開いて、来年からお田植え祭をしようとか、酒米を植えて法人の名前の四本松というお酒を造つて、瀬祭を抜いてやろうとか、久しぶりに明るい未来の話をすることができました。八万円の出資が「百倍にも千倍にもなつて帰ってくるよ」とか「御社殿も立て替えられるよ」と夢のような話もしました。

有史以来、わが国の基幹産業は農業です。特に水田稲作は日本文化の中心に在ったはずです。水稲の伝来については、考古学、農学、民俗学などで諸説が唱えられています。私は、「国内で栽培される稲は、斎庭の稲穂の神勅によつて天照大御神様からの授かったもの」と考えた方がスッキリすると思います。「米粒を残すとばちが当たるよ」と幼い頃祖母に言われたことが、今も呪術のように心に残っていますが、それは「お米は神様からの授かりもの」だからです。

わが国のお米の消費量は、昭和三十七年をピークに下がり続けています。最新の統計では、日本人の一人のお米の消費量は、年間約五十キログラムです。お米の単位一石は二・五俵

で十斗、千合、約百五十キログラムとなり、かつては大人一人が一年で消費する量でした。今はその三分の一以下です。これに加え、お米の小売価格がスーパーで十キログラム約三千円、一俵に直すと一万八千円程度、出荷価格はせいぜい一万三千円が関の山です。今はもう稲作だけでは農家の家計は成り立たない時代となりました。

このため、国（農林水産省）は、水田活用直接支払交付金や畑地化交付金など、飼料用のお米や麦、大豆などの戦略作物の栽培を奨励し、補助金を餌に水田の畑地化を図っています。麦秋（麦は春に収穫するので、麦作では春を「麦秋」と呼ぶ。）の傍らで春祭りが斎行されるという、何ともへんてこな季節感を味わわなければなりません。国は、お米を作ることに敵意を持っているとは思えません。

わが国の主食はお米です。ここ二百年の間で品種改良を重ね、本当に世界で一番おいしいお米が、わが国にはたくさんあります。ですから、皆さん、腹が減ったらお米を食べましょう。お米の消費量が増えれば、田んぼはこれから田んぼのままです。田んぼをわざわざ畑にしなくても、遊んでいる農地を畑にして、輸入に頼っている農産物を栽培すれば、

わが国の食料安全保障は強化されるのです。

どうか、朝昼晩、一膳ずつ「おまんま」を食べてください。そうすることが、「神道と稲作」を持続可能なものにします。もう一度言います。腹が減ったらお米を食べよう。

ご清聴ありがとうございました。

(山口県 惣社八幡宮 宮司)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

幹事・監査	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	参事	参事	副会長	副会長	会長
佐々木美津子	木下久榮	河本文夫	鍵三夫	小野日隆	生 寫經和	荒木眞幸	山下裕嗣	落合偉洲	村田和之	芦原高穂	戸内康雅	山本行恭		
天照御祖神社	大江八幡宮	宮尾八幡宮	志波彦神社鹽竈神社	八坂社	松尾大社	月山神社	白山神社	久能山東照宮	長束神社	旭川神社	心清水八幡神社	椿大神社		
宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	宮司	名譽宮司	宮司	宮司	宮司	宮司		

幹 事
幹 事・監査
幹 事
幹 事
幹 事
事務局長
事務局員

鈴木明子
中木屋 豊
塙 東 男
宮 田 修
村 瀬 佳 子
芝 幸 介
小 倉 雄 大

立木神社
稻荷神社
笠間稻荷神社
熊野神社
長束神社
椿大神社
椿大神社

権禰宜
宮司
宮司
宮司
権禰宜
権宮司
権禰宜

令和五年七月中国大会現在

神道講演全国大会のあゆみ

大 会		開催年月日		開催場所		大会会長		実行委員長		事務局長		講 話 集	
第一回	東京大会	昭和四六年八月四～六日		神社本庁				石沢 久英		久保田博人			
第二回	広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日		塩屋神社				石沢 久英		河野 貞愛			
第三回	伊勢大会	昭和五四年八月二七～二九日		神宮会館				猪瀬 好一		山本 行隆		五十鈴川	
第四回	九州大会	昭和五八年六月七～一〇日		太宰府天満宮				西高辻信貞		宇都宮正元		神国の春	
第五回	みちのく大会	平成元年八月二一～二三日		高山稲荷神社		工藤 伊豆		新山 昌孝		平澤 明穂		平成の民の祈り	
第六回	伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日		椿大神社		岡本 健治		山本 行隆		二橋 一彦		うまし国日本	
第七回	東京大会	平成三年八月二七～二九日		全国神社社会館		大野 俊康		山本 行隆		青島清三郎		食国の祈り	
第八回	宮崎大会	平成四年八月二四～二六日		宮崎神宮		大宮 四郎		山本 行隆		本部 雅裕			
第九回	愛媛大会	平成五年七月一九～二一日		愛媛県護国神社		大宮 四郎		山本 行隆		小川 純生		天翔るみたま	
第一〇回	東京大会	平成六年七月二一～二三日		靖國神社		大宮 四郎		山本 行隆		坂 明夫			
第一一回	北海道大会	平成七年八月三～五日		鳥取神社		山本 行隆		鈴木 瑞彦		奥谷由起子		大禊	
第二二回	広島大会	平成八年七月一六～一八日		三瀧荘		山本 行隆		村田 和之		村田 和弘			

大 会		開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一三回	伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山
第一四回	京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一洌	嶋田 達久	追憶
第一五回	東京大会	平成一一年九月九～一一日	全国神社社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回	愛媛大会	平成一二年八月二三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回	石川大会	平成一三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回	鹿児島大会	平成一四年八月二一～二三日	霧島神宮	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回	愛知大会	平成一五年六月二五～二七日	熱田神宮	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二〇回	鳥根大会	平成一六年七月一三～一五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回	宮城大会	平成一七年八月二三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	宇仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回	北海道大会	平成一八年六月二二～二三日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき
第二三回	奈良大会	平成一九年六月一八～二〇日	石上神宮	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回	伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	畠田 明彦	神風のむすび
第二五回	茨城大会	平成二一年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	畠田 明彦	常陸の祈り
第二六回	山口大会	平成二二年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	畠田 明彦	至誠のかがみ

	大 会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講 話 集
第二七回	沖縄大会	平成二三年六月二～一四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	畠田 明彦	魂の島から
第二八回	愛媛大会	平成二四年八月二八～三〇日	石鎚神社	十亀 興美	佐古 一洌	畠田 明彦	愛比賣の睦び
第二九回	京都大会	平成二五年六月一～一三日	京都府神社庁	田中 恆清	佐古 一洌	畠田 明彦	平安の念ひ
第三〇回	石川大会	平成二六年六月一～一三日	白山比咩神社	村山 和臣	佐古 一洌	畠田 明彦	くくり
第三一回	伊勢大会	平成二七年七月一～一五日	椿大神社	石上 紀男	落合 偉洲	大竹 久雄	御みちびき
第三二回	東北大会	平成二八年七月一九～二一日	盛岡八幡宮	藤原 隆磨	落合 偉洲	大竹 久雄	みちのくのいのり
第三三回	北海道大会	平成二九年六月二〇～二二日	北海道神宮	落合 偉洲	山本 行恭	大竹 久雄	北鎮のおたけび
第三四回	関東大会	平成三〇年六月一九～二一日	鶴岡八幡宮	山本 行恭	戸内 康雅	大竹 久雄	鎌府の言霊
第三五回	九州大会	令和元年七月一六日～一八日	佐嘉神社	山本 行恭	戸内 康雅	芝 幸介	栄の国から 令和の祈り
第三六回	伊勢大会	令和四年九月二〇日～二三日	椿大神社	山本 行恭	戸内 康雅	芝 幸介	新時代のいぶき ～伊勢国から～
第三七回	中国大会	令和五年七月一二日～一四日	野田神社	山本 行恭	戸内 康雅	芝 幸介	周防緑蔭に学ぶ

講話集 周防緑蔭に学ぶ

—第三十七回 神道講演全国研修大会 中国大会—

発行 令和六年七月一日

編集者
装幀者
神道講演全国協議会事務局

印刷所
製本所
三重県いなべ市北勢町阿下喜二六七一一
共栄堂印刷株式会社

発行所
神道講演全国協議会

〒五九〇三五 三重県鈴鹿市山本町一八七一
TEL〇五九(三七二)一五二五(代)
FAX〇五九(三七二)一六六八
椿大神社社務所内

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします



